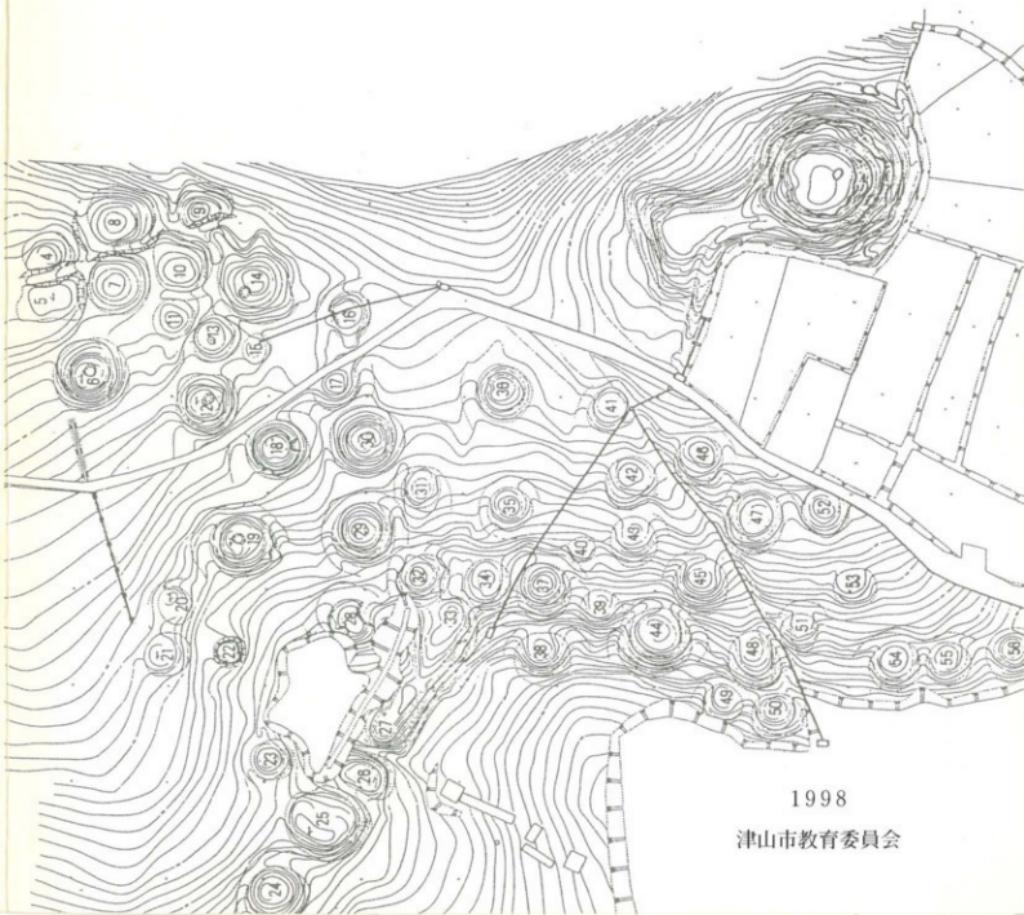


# 日上畝山古墳群



1998

津山市教育委員会

巻頭図版 1



日上歟山 1 号墳中心埋葬主体（東から）



日上歟山 1 号墳第 2 埋葬主体（西から）

巻頭図版 2



日上歟山 6 号墳（西から）



日上歟山 6 号墳中心埋葬主体遺物出土状況（東から）

卷頭圖版 3



日上歟山 6 号墳出土鐵劍



日上歟山 14 号墳外埋葬出土鐵斧

# 日上畝山古墳群

津山市埋蔵文化財発掘調査報告 第63集

1998

津山市教育委員会



## 序 文

津山市の東部、日上地区の畝山丘陵は、津山城築城にあたって建設候補地のひとつとなつたことが伝えられています。この話のとおり、丘陵からは四方がはるかに見わたせる絶好の立地であり、今も周囲には豊かな田園地帯が広がっています。

その丘陵に存在する日上畝山古墳群は、県下でも有数の古墳群として古くから知られてきています。文化財保護行政上も重要遺跡のひとつとして、主要部分は現在まで良好な状態で保存されてきています。しかしながらそのいっぽうで、鬱蒼とした森におおわれ、その全体像をつかむことは容易ではありませんでした。

津山市では、日上畝山古墳群の保存に向けた基礎資料を得ることを目的として、平成7年度から国の協力を得ながら詳細分布調査を実施することができました。もとより、大規模な古墳群の一部の調査にすぎませんが、その重要性を認識することができたと確信しています。本書は、その結果を報告するものです。

古墳群と同じ丘陵上に隣接する市指定文化財の日上天王山古墳につきましても、多くの方がたのご支援のもと、先般学術調査を実施することができました。調査の結果、古墳時代前期の代表的な古墳としてその価値を再認識することができました。

今回得られた資料をもとに、これらの古墳はもとより、隣接する美作国分寺などを含む貴重な歴史遺産を保存活用して行きたいと考えています。皆様方のご協力とご支援をいただきますよう願ってやみません。

終わりになりましたが、調査にあたってご理解とご協力をいただいた地元関係各位に敬意を表するとともに、篠くお礼申しあげます。

平成10年3月31日

津市教育委員会

教育長 松 尾 康 義

## 例　　言

- 1 本書は日上古墳群遺跡詳細分布調査の報告書である。
- 2 調査は国庫補助事業として平成7年度から平成9年度まで、3次にわたって津山市教育委員会が実施した。
- 3 平成7年度には全体測量を行い、平成8年度および9年度にそれぞれ古墳2基、合計4基の発掘調査を行った。
- 4 測量の結果、確認できた古墳には1号から始まる通し番号をあらたに設定して古墳名とした。旧来からの古墳番号は、混乱をさけるために原則として「旧」を付して使用する。
- 5 調査は津山市教育委員会文化課が担当し、文化庁、岡山県教育委員会、近藤義郎氏（岡山県文化財保護審議委員会委員）の指導助言を受けて、中山俊紀、安川豊史、行田裕美、坂本心平が津山弥生の里文化財センター職員の援助を得ながら現地の測量および試掘調査にあたった。
- 6 調査に使用した座標は第V直角平面座標系で、第4図のX・Y座標数値の単位はmである。本書で使用した方位は座標北を示し、高さは海拔高である。
- 7 本書の執筆と編集は安川が担当した。執筆にあたっては各担当者から教示を得た。
- 8 出土遺物および図面等は津山市教育委員会津山弥生の里文化財センターに保管している。

## 本文目次

I 位置と環境	1
1. 遺跡の立地	1
2. 周辺の遺跡	1
II 調査の経過	5
1. 従来の知見	5
2. 調査の経過	6
III 調査の記録	9
1. 古墳群の概要	9
2. 1号墳	13
3. 6号墳	20
4. 14号墳	32
5. 35号墳	38
IV まとめ	45
1. 古墳群の年代と構成	45
2. 古墳群の特質と評価	48
付編 古式群集墳一覧表	51

## 挿図目次

第1図 位置図	1	第19図 6号墳中心埋葬主体出土上器実測図2	26
第2図 日上欽山古墳群と周辺の主要遺跡	2	第20図 6号墳出土遺物実測図	27
第3図 日上欽山古墳群全体図	10	第21図 6号墳第2埋葬主体出土上器実測図	28
第4図 日上欽山古墳群主要部測量図	11-12	第22図 6号墳出土土器実測図	29
第5図 1号墳全体図	14	第23図 6号墳出土埴輪実測図	30
第6図 1号墳丘断面図	15	第24図 14号墳全体図	32
第7図 1号墳中心埋葬主体実測図	16	第25図 14号墳丘断面図	33
第8図 1号墳中心埋葬	17	第26図 14号墳埋葬主体実測図	34
第9図 1号墳第2埋葬主体実測図	17	第27図 14号墳出土遺物実測図	34
第10図 1号墳下層遺構実測図	18	第28図 14号墳外埋葬主体・鉄器実測図	35
第11図 1号墳出土鉄器実測図	18	第29図 35号墳全体図	37
第12図 1号墳出土遺物実測図	19	第30図 35号墳南埋葬主体実測図	38
第13図 6号墳全体図	20	第31図 35号墳北埋葬主体実測図	39
第14図 6号墳墳丘断面図	21	第32図 35号墳出土上器実測図1	40
第15図 6号墳中心埋葬主体実測図	22	第33図 35号墳出土上器実測図2	41
第16図 6号墳中心埋葬主体遺物出土状況	23	第34図 35号墳出土上器実測図3	42
第17図 6号墳第2埋葬主体実測図	24	第35図 35号墳出土鉄器実測図	42
第18図 6号墳中心埋葬主体出土土器実測図1	25	第36図 35号墳出土遺物実測図	43

## 写真図版目次

卷頭図版1 日上欽山1号墳中心埋葬主体（東から）	写真図版7 6号墳 墳丘
日上欽山1号墳第2埋葬主体（西から）	写真図版8 6号墳 埋葬施設
卷頭図版2 日上欽山6号墳（西から）	写真図版9 6号墳 埋葬施設
日上欽山6号墳中心埋葬主体遺物出土 状況（東から）	写真図版10 14号墳 墳丘
卷頭図版3 日上欽山6号墳出土鉄器、日上欽山14 号墳外埋葬出土鉄斧	写真図版11 14号墳 墳丘・埋葬施設
写真図版1 1号墳 墳丘・埋葬施設	写真図版12 14号墳 埋葬施設他
写真図版2 1号墳 埋葬施設	写真図版13 35号墳 墳丘・埋葬施設
写真図版3 1号墳 埋葬施設	写真図版14 35号墳 埋葬施設
写真図版4 1号墳 列石	写真図版15 35号墳 埋葬施設他
写真図版5 1号墳 墳丘・下層遺構	写真図版16 6号墳出土遺物1
写真図版6 6号墳 墳丘	写真図版17 6号墳出土遺物2
	写真図版18 35号墳出土土器
	写真図版19 1-14-35号墳出土鉄製品

# I 位置と環境

## 1. 遺跡の立地

日上歿山古墳群は、津山市街地の南東、加茂川と吉井川の合流点の東に所在する丘陵上に位置する。行政上区画は岡山県津山市日上419番地他に属する。JR東津山駅の約1km南に位置する。国道53号線からは、津山市東松原交差点東を吉井川沿いに南下し、日上集落で左折して国分寺方向に約500m進めば古墳群にいたる。

苦田郡加茂町から南下する加茂川は津山市河辺地区で西に蛇行し、津山市街地を東行して南下する吉井川に合流する。その後、吉井川は東に大きく蛇行し、さらに南下する。古墳群の所在する丘陵は、北側を加茂川に、西側と南側を吉井川に囲まれた段丘上に位置し、丘陵北側は急峻な断崖となって加茂川の旧河道に面し、南側は段丘面となっている。丘陵は東西600m、南北450m程の広がりをもち、周辺の平地との比高は20m程である。中央部から南北に開けた小谷が存在し、そのため南方からは二つの丘陵に分かれて見える。そのうち東側に位置する歿山丘陵の多くは林地であるが、西丘陵は開墾が進み、大半が畠地となっている。歿山丘陵の南方に位置する最高所に墳長約56mの日上天王山古墳が前方部を北北西に向けて位置し、そこから西北にかけて多数の古墳が存在する。古墳のほとんどは東丘陵に存在するが、西丘陵にもいくつかの古墳がかつて存在したと伝えられている。後者のうち現存するのは日上八幡神社境内に存在する半壇した円墳1基にすぎない。歿山丘陵の東側は急斜面となっていて、古墳は南北に延びた尾根筋から西側の緩斜面にかけて位置する。

日上歿山古墳群の範囲についてはかならずしも明らかでない。本書では、丘陵中央部の谷を境として東丘陵上の日上天王山古墳を除く他の古墳を指すこととする。

## 2 周辺の遺跡

歿山丘陵南端の最高所には古式の前方後円墳である日上天王山古墳(註1)が日上歿山古墳群に隣接して所在する。周辺地区的前方後円墳としては歿山の北3.4kmの丘陵上に正仙塚古墳(墳長約55m)が存在する。長持形石棺の埋葬形態はことなるが、墳形と規模はほぼ天王山古墳に一致し、両者は同一の首長系列にあると考えられてい

る(註2)。一貫東1号墳(墳長31m)も墳形から前半期に属すると考えられる前方後円墳で、墳頂から角閃石を多量に含む土器片が採集されている。

後半期に属する前方後円墳として、茶山1号墳(墳長20.6m)があげられる(註3)。調査の結果、後円部中央に竪穴式石槨の中心主体が存在するが、その他



第1図 位 置 図



- |           |             |              |            |           |
|-----------|-------------|--------------|------------|-----------|
| 1 日上歛山古墳群 | 7 河辺小学校裏古墳群 | 13 正仙塚古墳     | 19 西吉田北1号墳 | 25 大畠古墳群  |
| 2 日上天王山古墳 | 8 河辺上原古墳群   | 14 押入坂脇神社古墳群 | 19 長戻山古墳群  | 26 小原古墳群  |
| 3 日上和田古墳  | 9 兼田丸山古墳    | 15 鉢塚通跡      | 21 長戻山北古墳群 | 27 柳谷古墳   |
| 4 美作国分尼寺  | 10 川嶋大塚古墳   | 16 能満寺古墳群    | 22 茶山古墳群   | 28 クズレ塚古墳 |
| 5 国分寺般塚古墳 | 11 川嶋六ツ塚古墳群 | 17 井口1号古墳    | 23 一貫東古墳群  | 29 堀レ塚古墳群 |
| 6 美作国分寺   | 12 伊入西1号墳   | 18 天神原古墳群    | 24 貫西遺跡    |           |

第2図 日上歛山古墳群と周辺の主要遺跡 (国土地理院25,000分の1地形図「津山東部」)

にも前方部に向けて木棺直葬による4箇所の追葬が認められた。径約8mの円墳1基をともない、6世紀初頭の築造である。玉琳大塚古墳(墳長約35m)は櫛櫛をもち、轡、雲珠、鏡具などの馬具が出土している(註4)。井口車塚古墳(註5)は、墳長35.5mの帆立貝式古墳で周濠をもち円筒・形象埴輪が出土した。5世紀末頃の築造と推定されている。

以上のように、5世紀後半以降、周辺地域の前方後円墳は総じて小形化するいっぽう、これまで前方後円墳のなかった地区にあらたに築造される例が増えることにも注意しておきたい。そのなかで、十六夜山古墳は、ながらく大形円墳と考えられていたが、近年の調査によって盾形の周濠をめぐらせた墳長約60mの前方後円墳であったことが確認された(註6)。築造時期については5世紀後半頃と推定されており、歓山古墳群などの成立ともかかわる重要な古墳のひとつといえよう。

次章で述べるように、歓山古墳群の中にもかつて1基の前方後円墳(80号墳)が存在した(註7)。また、丘陵中央部に残された石碑に記載されている「古墓(冢)」も前方後円墳であった可能性が高いが、80号墳との異同など詳細は不明である。

前方後円墳以外の大形墳としては国分寺飯塚古墳があげられる。直径35mの円墳で葺石、埴輪が認められる。

歓山古墳群に先行すると考えられる群小墳には、円墳と方墳の二者がある。兼田丸山古墳(註8)は2基の小墳の可能性が指摘されている。箱式石棺から四獸鏡および枕に転用された土師器蓋が出土していて前半期に属する方墳であった可能性がある。崩レ塚古墳群(註9)は方墳3基と円墳1基からなる。直径および1辺が5mから8mまでの小規模なもので方墳は箱式石棺を内部主体とする。一貫東古墳群(註10)は先述した一貫東1号墳を含む古墳群で、7基の円・方墳がある。これらは先にふれた前方後円墳からやや離れて位置し、遅れて築造されたと考えられる。押入飯綱神社古墳群(註11)には5世紀後半の方墳と遅れて築造された円墳がある。押入西1号墳(註12)は直径12.5mをはかる木棺直葬の円墳で、素環頭大刀や帶金具等が出土した。5世紀中葉の築造と考えられる。西吉田北1号墳(註13)は1辺が約10mの5世紀中葉頃の方墳で単独で存在する。内部主体は箱式石棺と考えられ、鉄鋲、鑿といった鍛冶具や鉄鏃が出土した。

歓山古墳群とほぼ同時期の群小墳についてもかなりの数の調査例がある。日上和田古墳(註14)は、直径推定19mの単独の円墳で、内部主体に櫛櫛をもつ。須恵質を含む埴輪をもち、かつて銀環、轡、鏡、刀、鉄鎌、冑などが出土した。6世紀前葉の築造である。長歓山北古墳群(註15)は歓山古墳群の1.5km東に位置する12基からなる古墳群で、そのうちの10基が調査されている。これらは直径17mから8mまでの円墳で5世紀末から6世紀初頭にかけて築造されたものである。長歓山北古墳群は、長歓山北古墳群の南西側に谷を隔てて対する古墳群で、8基の円墳が確認できる。うち1号墳と2号墳の調査が行われている。2号墳(註16)は古墳群中最大のもので直径17m弱をはかる。本墳からは鉄鋲、鐵鎌などが出土した。埴輪をもち、5世紀末の築造である。川崎六ツ塚古墳群は7基の円墳からなる(註17)。1号墳はそのうちの最大のもので、造出しと鉢巻状の葺石および埴輪をもつ。墳長21m。河辺上原古墳群(註18)は3基の円墳で、6世紀初頭から前葉にかけて築造された。そのほかにも、大畠古墳群、小原古墳群、天神原古墳群などが調査されている。

こうした5世紀末から6世紀前葉にかけての群小墳にみられる特徴は、内部主体は少數の堅穴式石櫛ないしは櫛櫛に木棺直葬が加わるという構成をもつこと、そして古墳への鉄滓供獻が盛んになることなどである。鉄滓はいずれも鍛冶津に分類される(註19)。

その後に続く古墳の調査例は少ない。横穴式石室をもつものとしてクズレ塚古墳(註9)と柳谷古墳(註20)があげられる程度である。クズレ塚古墳は、直径約13mの無袖の横穴式石室をもつ円墳で、6世紀後半の築造である。土師質亀甲形陶棺がもちいられ、銅石製鍊滓が供獻されていた。柳谷古墳は直径7.5mの小円墳で銀象嵌をほどこした頭椎大刀把頭、鞘尾金具が出土した。6世紀末から7世紀初頭の築造。横穴式石室墳については、断片的な知見はあるものの資料化された古墳は少數である。これは、前代の古墳群の多くが丘陵上に立地するのに対し、これらが丘陵裾に位置することが多く、早くから破壊を受けていた理由にもよるものと考えられる。

その後、和銅6(713)年に美作国が設置され、歎山古墳群の東方に美作国分尼寺跡、同国分寺跡が置かれる。国分二寺を経て歎山丘陵裾を通過する官道の存在が推定されている。

#### 註

- 1 近藤義郎他 1997 「日上天王山古墳」津市埋蔵文化財発掘調査報告第60集
- 2 安川豈史・坂本心平「正仙塚古墳測量調査報告」「年報津山弥生の里」第3号
- 3 保田義治 1989 「茶山古墳群」津市埋蔵文化財発掘調査報告第27集
- 4 今井亮 1961 「津市市川崎玉琳大塚調査報告」「津市文化財調査略報」第1集
- 5 小郷利幸 1994 「井口市塚古墳」津市埋蔵文化財発掘調査報告第52集
- 6 尾上元規 1995 「十六夜山古墳開発跡」「岡山県埋蔵文化財報告」25  
金田善敬 1996 「県立津山高校校舎改築に伴う発掘調査」「岡山県埋蔵文化財報告」26
- 7 河本清 1986 「日上歎山古墳群」「岡山県史」第18巻
- 8 木村豪章 1974 「美作・津市兼田丸山古墳出土遺物の研究」「MUSEUM 東京国立博物館美術誌」285
- 9 行田裕美・小郷利幸 1990 「崩れ塚古墳群・クズレ塚古墳」津市埋蔵文化財発掘調査報告第31集
- 10 清野哲夫 1992 「一貫東遺跡」津市埋蔵文化財発掘調査報告第43集
- 11 橋本聰司 1973 「押入鉢瀬神社古墳群」「中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査2」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告4
- 12 柳瀬昭彦他 1973 「押入西遺跡」「中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査1」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告3
- 13 行田裕美他 1997 「西古田北遺跡」津市埋蔵文化財発掘調査報告第58集
- 14 行田裕美 1981 「日上和田古墳」津市埋蔵文化財発掘調査報告第6集  
行山裕美 1996 「日上和田古墳」増補「年報津山弥生の里」第3号
- 15 行田裕美・木村祐子 1992 「長歎山北古墳群」津市埋蔵文化財発掘調査報告第45集  
行田裕美・小郷利幸 1996 「長歎山北11号墳」津市埋蔵文化財発掘調査報告第57集
- 16 坂本心平 1996 「長歎山2号墳出土の資料について」「年報津山弥生の里」第3号
- 17 今井亮 1972 「原始社会から古代国家の成立へ」「津市史」第1巻原始・古代
- 18 小郷利幸 1994 「河辺土原遺跡」津市埋蔵文化財発掘調査報告第54集
- 19 安川豈史 1992 「古墳時代における美作の特質」「吉備の考古学的研究」下
- 20 行田裕美・保田義治 1988 「柳谷古墳」津市埋蔵文化財発掘調査報告第24集

## II 調査の経過

### 1 従来の知見

日上歎山古墳群については、今回の発掘調査以前にも先人達による一部の調査が実施され、その最も古い報告が秋久秀二郎によってなされている(註1)。秋久は1890(明治23)年から翌年にかけて4基の古墳を発掘し、竪穴式石槨等の埋葬主体から須恵器と考えられる多数の土器、ガラス小玉、金環、管玉、各種鉄器を発見している。秋久の報文には、彼自身の手によらない他の発掘についても述べられているので、年代順に整理すれば次のとおりである。1872(明治5)年に北条縣による勧農所設置に伴う開拓の際に「古景」(註2)を発掘し、刀剣、矢鏃、甲冑、水晶玉、鏡(径5寸)、金環、多数の陶器(須恵器か)等を発見した。この際の発掘の模様については現地に存在する古景碑に記されている。1885年頃、古墳群の西方の細から2体の人骨を納めた箱式石棺が発掘され、径5寸の鏡1面、短刀1、管玉、ガラス小玉が出土したという。以上の古墳等の正確な位置については不明である。

その後、歎山北の丘陵一帯を地下げして水田化する工事が進行し、1967年8月から同年10月にかけて前方後円墳1基と円墳3基、その他が発掘調査されている(註3)。北条縣による開拓のため古墳の埴輪はすべて削平を受けていて、いずれも周溝部分が残存していたにすぎない。しかし、周溝中からは埴輪等のほかにも開拓の際に内部主体から掘り出されて遺棄された可能性のある多くの遺物が出土している。

旧50号墳(註4)は直径13.8mの円墳で、周溝の幅は2~3m、葺石をもつ。円筒埴輪、土師器、須恵器が出土した。須恵器には子持ち高环、大小の甕、环、高环、壺が含まれる。

旧51号墳(日上歎山80号墳)(註5)は前方後円墳で、周長推定31.4m、前方部幅約12m。盾形周溝を持ち、後円部周辺の幅約3m、くびれ部における幅6~7m、深さ3mをはかる。出土遺物のうち獸形鏡(変形五獸鏡、径15.2cm)、装身具(こくは製勾玉1、小玉約10)、鐵鏃、馬具(鉄具、鐵地金銅貼F字形鏡板)、須恵器(环、高环、甕、碗他)、土師器は内部主体に由来するものと考えられた。その他に器財埴輪(衣蓋、盾等)、円筒埴輪、須恵器大甕、器合他が出土している。葺石をもち、内部主体は削石積みの竪穴式石槨であったと推定されている。

旧52号墳は径14m弱の円墳で、幅2~3mの周溝をもつ。葺石をもち、形象埴輪(人物2、不明)、円筒埴輪(須恵質を含む)、須恵器(环、高环、子持ち高环、器台、大甕、碗他)が出土した。

旧53号墳は径13~14mの円墳で、葺石をもつ。円筒埴輪、須恵器大甕が出土した。

今井堯と近藤義郎は上記の資料等をもとに中・四国地方の群集墳を概観した論文中で、はやく形成された群集墳の一例として日上歎山古墳群を紹介した(註6)。9基の古墳から出土した須恵器の編年観から、古墳群の形成期を5世紀後半から6世紀と指摘した。

また、川西宏幸は瀬戸内地方の円筒埴輪を編年する際に、旧52号墳および51号墳出土埴輪を検討し、瀬戸内Ⅳ期とV期に位置づけた(註7)。

上記のように、本古墳群は美作における代表的な群集墳として古くから研究者の関心を引いてきた。特に、今井・近藤論文を契機として、中・四国における横穴式石室導入以前の群集墳の代表例として広く知られるようになった。しかしながら、これまで発掘調査されたのは、すでに埴丘を削平されていたものが主体であって、埋葬施設等の内容については不明な点が多く残されていた。

## 2. 調査の経過

古墳群の規模についても古くから約50数基が存在するとされてきたが、現状ではじゅうぶんに把握できていないので、古墳の正確な数や規模・構造などを確認することを目的とした日上歓山古墳群の調査を、道跡詳細分布調査として実施することとした。調査は平成7年度から9年度までの3ヶ年計画とした。

実施に先立ち地元説明会をおこない、調査への理解と協力をお願いしたところ、幸いにも積極的な協力をいただけたこととなった。

平成7年度事業は、基礎作業として全体の測量図の製作をおこなうこととし、平成7年10月1日に着手し、平成8年3月31日に完了した。

現地は一部の畠地を除いて大半が雜木林で、灌木の繁茂が著しく、そのままでは測量作業是不可能な状況にあった。そのため、下草および小口怪の灌木の最小限の除伐をおこなうこととし、平成7年11月8日から現地作業を開始した。除伐が進むにつれ、当初の予想よりも古墳群が広がることが判明したため、作業範囲を一部拡大して平成8年1月30日に終了することができた。しかし、伐採した下草等は全体で膨大な量にのぼり、すべてを撤去することは不可能なため、古墳埴丘付近は取り除くこととし、そのほかの地区は要所要所に集積することとした。

測量は、約4.7haを対象とし、全域に国土座標に基づく合計33点の基準点を設置し、そのうちの5点については永久標柱を埋設した。古墳集中地域および古墳については25cm等高線で縮尺200分の1に、その他の地形については50cm等高線で縮尺500分の1にそれぞれ測量図を作図したのち、全体図を500分の1に編集製図した。なお、古墳の測量については、津山市教育委員会職員が常駐し、測点の指示にあたった。平成7年12月8日から測量に着手し、翌年の3月25日に製図を完了した。

平成8年度には古墳2基の発掘調査を実施した。対象古墳には、丘陵北端部の最高所に位置する比較的大形の1号墳と、古墳群南部の古墳密集部分の緩傾斜面に位置する3・5号墳を選択した。調査の方法はトレレンチ調査とし、調査後には埋め戻して原状にどした。

1号墳の調査区は、埴丘中央の埋葬主体部分と埴丘上のトレレンチ8箇所の計9箇所で、調査面積は157m<sup>2</sup>。3・5号墳は、埋葬主体部分と埴丘上のトレレンチ4箇所を調査し、調査面積は32m<sup>2</sup>である。調査地点は津山市日上434-1、431-3、422-2番地。

平成8年6月3日に1号墳から現地調査に着手した。まず盗掘坑があった中心主体の擾乱土を除去し、竪穴式石棺の中心から石棺主軸に平行、直交するトレレンチ(T1-T4)を設定した。したがってトレレンチの方位は座標方位に一致しない。1号墳は、当初円墳の可能性も考えられたが、T1から東西方向の列石が検出され、検出部分を東に拡張したところ、列石は直線的に延び、方墳の可能性が高くなつた。このため、T5を設定して列石を追求するいっぽう、T6を設定して埴丘北西部の把握を試みた。続いてT7・8を設定し、これら埴丘のトレレンチを7月末まで終了した。埴丘調査に並行して、主体部の発掘をおこなった。中心主体はほぼ床面まで攪乱が及んでいたが、7月初めに床面全面を検出した。中心主体に接して西側に検出した第2主体は、箱式石棺の蓋石を検出した後、床面および遺物の検出を8月6日に終了した。7月23日から3・5号墳の調査に着手した。埴丘上に座標方向に沿った東西南北のトレレンチを設定し、並行して主体部の検出をおこなった。

その後、実測作業を実施し、9月17日に埋め戻しを含むすべての作業を完了した。この間、8月

18日には現地説明会を開催した。

平成9年度は6号墳と14号墳の発掘調査を実施した。これらは、古墳密集地の北東端にあたり、丘陵の尾根筋に近い地点にある。両者とも古墳群の中では比較的大形のもので、この種の古墳の構造等の把握を目的とした。前年度と同様、トレンチ調査の方法をとり、調査後は埋め戻した。

6号墳の調査区は埋葬主体部分と東西南北トレンチの合計5箇所で、調査面積は73m<sup>2</sup>。14号墳の調査区は、墳丘中央部の埋葬主体部と墳丘および一部墳丘外をふくむ8箇所で、調査面積は136m<sup>2</sup>。調査地点は津山市日上422-1、422-5、423番地である。

平成9年5月9日に両古墳の基準杭を設置したのち、5月12日に発掘器材を搬入して14号墳の調査から着手した。5月30日からは6号墳の発掘を開始し、以後並行して調査を続けた。6号墳については埋葬主体が比較的早くから検出され順調に調査を進めることができたが、14号墳については後世の改変が著しく構造の把握には時間を要した。7月中旬に埋葬主体を検出し、統いて墳丘の南7mの地点で別の埋葬施設を発見、精査した。その後、遍査実測、写真撮影をおこない、8月29日に埋め戻し作業を含む現場作業を終了、9月から出土遺物等の整理に入った。

測量および発掘調査などの現地調査については、文化庁および岡山県教育委員会の指導、助言を受けながら実施した。

測量および発掘調査、遺物等の整理作業は下記の体制で実施した。

津山市教育委員会 教育長	藤原修己(8年9月30日まで)
	松尾康義(8年10月1日以降)
教育次長	内田康雄(7年度)
	中尾義明(8年度)
	山本直樹(9年度)
文化課長	初山三千穂(7・8年度)
	永礼宣子(9年度)
文化財センター所長	神田久遠
次長	中山俊紀
主査	安川豊史(9年度調査、整理)
	行田裕美(7・8年度調査)
主事	坂本心平(8年度調査)
主任	青木睦子(8年9月30日まで事務)
主事	坂本祐子(9年度事務)
嘱託員	野上恭子、岩本えり子、家元弘子(整理)
臨時職員	浅國美恵、丸王桂苗、広政美智子、八幡佳奈絵

現地の発掘等の作業は津山市シルバーハウスセンターにお願いした。作業従事者は下記の方々である。

(調査作業員) 秋久茂、石岡敏、福垣裕史、内田勲、梶尾嘉明、加藤文平、末澤賢次、竹内誠介  
谷口末男、内藤英敏、仁木誠郎、原田武藏、原村太郎、藤沢淳一郎、森二三夫  
山下加海、

(学生アルバイト) 赤坂健太郎、熊代昌之

現地調査にあたっては地元地権者をはじめとする下記の方々のご協力をいただいた。

秋久昌大、秋久富喜代、秋久宣臣、秋久繁夫、秋久俊量、伊藤文子、可児昭二、坂手空次郎  
坂手均、坂手豊彦、坂手良旦、宰相一、直原鏡、直原種子、直原太郎、直原英三郎、島田美花一  
島田益美、新免勝敏、立石輝雄、立石林太郎、立石泰通、立石学、立石覓子、原田郷司、山田よし也  
山本浩、木下二二夫、山下浪枝、渡邊眞、有木邦城、横林武彦、坂手良旦、早川石峯  
整理作業および報告書作成にあたっては、大久保徹也、大澤正己、大谷晃二、藏本晋司、桑原隆博、  
中村弘、比佐陽一郎、松井潔、水島圭一の方々のご協力をいただいた。

調査指導をいただいた先生方ははじめ上記の方々にお礼申しあげます。

## 註

- 1 秋久1900によれば、「古景」は古來大塚(日上天王山古墳)に対して小塚と称し、その形狀が大塚に類似するとのことで、墳丘形態は前方後円墳であった可能性が高い。そうであるとすれば、木古墳群には日上天王山古墳を除いて日上歛山80号墳とあわせ2基の前方後円墳が存在していたこととなるが、断定はさておく。
- 2 秋久秀二郎 1900 「岡山縣下勝山郷國分寺附近古墳探検の記」「考古」第1編第6号
- 3 以下の古墳の記述は主として渡辺健治「日上歛山北古墳群の問題点」(孔版)による。
- 4 これらの古墳には、50番から始まる古墳番号がつけられたが、その後80番代に変更された経緯があり、さらに今回の調査で確認した古墳56基に新たな通し番号をつけたので、本書では番号の前に「旧」を付して区別する。
- 5 今井亮 1972 「原始社会から古代國家の成立へ」『津山市史』第1巻 原始・古代
- 6 今井亮・近藤義郎 1970 「群集墳の盛行」『古代の日本』第4巻 中国・四国 角川書店
- 7 川内宏幸 1988 「円筒埴輪総論」「古墳時代政治史序説」埴書房

### III 調査の記録

#### 1. 古墳群の概要

平成7年度の測量調査により、総数56基の古墳を確認した。古墳の分布は、丘陵の北端から南端部までの全体に及んでいる。古墳群の大半は丘陵南部に密集する。他の古墳は北端部付近に位置する。

北に位置する一群は3基からなり、北から順に1、2、3号墳がある。方墳の1号墳以外は円墳である。この一帯は、丘陵頂部の平坦面が狭く、北端の1号墳を最高所とし南方に緩やかに傾斜していく古墳はその上にほぼ一列に並んでいる。3号墳の南には占領碑が位置する。

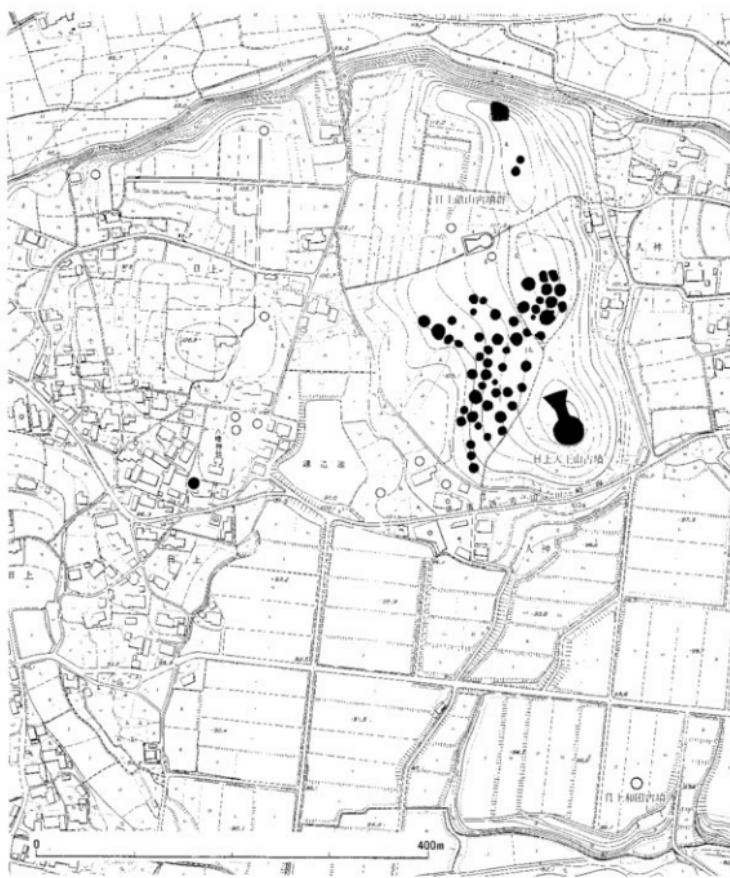
南半部は、丘陵中央部の最高所に位置する4、5号墳から南200m、西150mの範囲内に53基の古墳が集中する。この地区は、丘陵から南西に向かって下る緩斜面で、中央に谷が存在している。古墳はたがいに接して存在し、なかには周溝を共有するものも少なくない。現状ではこれらは明確な支群には分かれないと。

現記できる古墳および過去に調査された古墳は次表のとおりである。

番号	形態	規格	高さ	外表面	内部主体	道 物	備 考	番号	形態	規格	高さ	外表面	内部主体	道 物	備 考
1号	方	20.4	2	壁穴式石室 蓋石・石棺	洪積・地 木柵			32号	円	11.2	2.1				
2号	円	9	1					33号	円	12.2	2				横G一部削す
3号	円	10.5	1.5					34号	円	10.5	1.9				
4号	円	10	1					35号	円	9.4	1.6	本様直筒2 圓頭等 鉄器	本様		
5号	小方	13	0.8					36号	円	12.5	2				
6号	円	15.2	3.1	葺石・内側埴輪 壁穴式石室 木柵直筒	泥炭帯、粘土 登土、砂礫带 木柵	本柵		37号	円	12.1	2.8				
7号	円	12.5	1.5					38号	円	11.7	2.8				
8号	円	13.8	1.8					39号	円	9.2	2.1				
9号	円	12	2.3					40号	円	5.6	0.5				横G一部削す
10号	円	13.4	1.8					41号	円	9.6	1.4				
11号	円	9	0.9					42号	円	11.1	1.9				
12号	円	13	2.4	葺石・内側埴輪				43号	円	10.5	2.1				
13号	円	9.8	1.2					44号	円	15	3.9				
14号	方	16.6	2.4	粘土席	瓦砾(境外)	本柵		45号	円	12	2.8				
15号	円	6.3	0.9					46号	円	10.4	2.5	葺石			
16号	円	9.7	1.6	葺石		(突出部あり)		47号	円	12.7	2.5				
17号	円	10	1.8					48号	円	12.4	2.6				
18号	円	13.3	2.5	壁穴式打放せ 壁穴式石室				49号	円	8.3	1.5	葺石			
19号	円	11.2	2.5					50号	円	11.2	2.2				
20号	円	8	1					51号	円	8.1	1.8				
21号	円	10	1.5					52号	円	10.2	1.7				
22号	円	6.5	1.8					53号	円	8.3	1.5				
23号	円	9	2.1					54号	円	10.4	2.2	葺石			
24号	円	13.5	2.1					55号	円	9.2	1.6				
25号	円	17.7	2.6	葺石		埴丘一部削平		56号	円	11.7	2.3				
26号	円	12	2.5			東形		57号	円	31	葺石・埴輪	壁穴式石路?	圓頭等、 圓頭のみ造り		1967年調査 開溝のみ造り
27号	円	11				変形		58号	円	14		葺石・瓦砾等物	須恵器等	同上	
28号	円	10.4	1.5					59号	円	14		葺石・埴輪	須恵器	同上	
29号	円	13.4	2.9					60号	円	14		葺石・瓦砾等物		同上	
30号	円	15	2.7	葺石											
31号	円	8.5	1.1												

\*規格、高さは最大値を示し、単位はm

表1 日上欽山古墳群一覧表

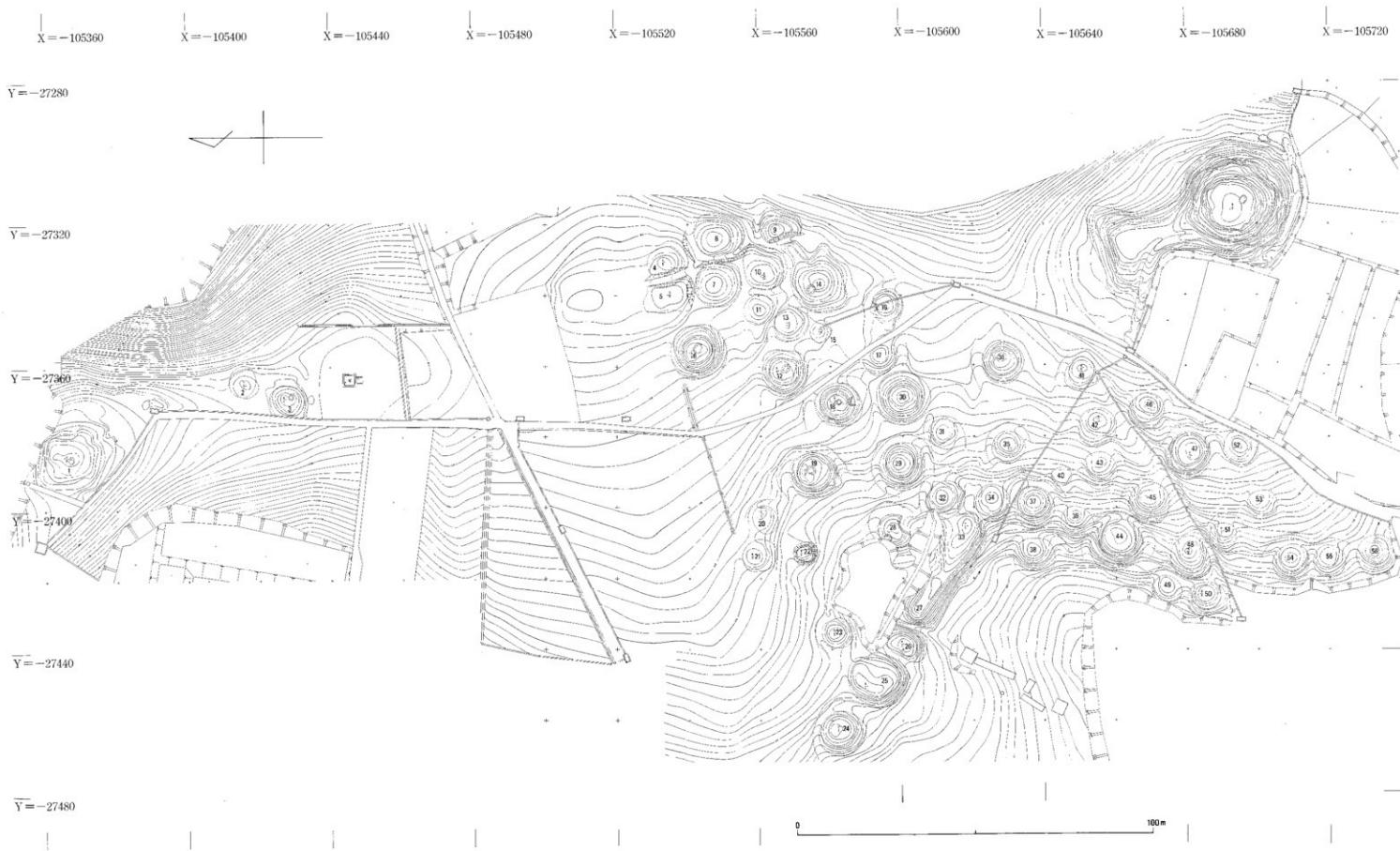


第3図 日上古山古墳群全休図 (1:5,000)

南方の古墳密集部の分布北端は、2・4号墳から4号墳まで、南西から北西方向の直線状を呈する。そこから3号墳までの100m程の区間に、現状では古墳は存在しない。

丘陵上には南から丘陵に上り、曲折しながら丘陵の北端に達する南北道路が存在する。その中央寄りの地点で、南西から北東に丘陵を横断する小道と交差している。丘陵上8・9号墳および円墳3基は、この交差点から南西にかけて検出されている。1967年の調査では付近に古墳4基の存在も確認されたので、すくなくともこの一帯には8基以上の古墳が存在したこととなる。したがって、この分布空白域は1872年の勧農所設置による開墾の際、古墳が破壊されて生じたものと考えられる。

これとは別に、丘陵南端に存在する日上天王山古墳との間に若干の空間がみられるが、これは古墳群の形成にあたり、天王山古墳の存在を意識したためと思われる。



第4图 日上皎山古墓群主要部分测量图 (1:1,000)

## 2. 1号墳

丘陵北端の最高所に位置し、北側は断崖となり加茂川南の低位段丘にいたる。発掘調査前は直径10mあまりの不整な墳形のため、円墳の可能性も考えられた。墳丘中央に盗掘坑が存在した。

この地点にはかつて高瀬神社が所在した。後に日上八幡神社に合祀されたため、現在は古墳北西隅に小さな祠を残すのみとなっている。墳丘の東側は平坦に整地された痕跡がうかがえ、ここが社地であったと考えられる。

墳丘(第5-6図) 墳丘中心から東方向に設定したT2では、中央から約7mのところに墳丘の落ち込みが観察され、当初これを東側墳端と認識したが、10.5mに位置にも地山の傾斜変換線が認められた。この変換線は、墳丘南東のT8から東に延びた二つの小トレンチでも確認されているので、これが東墳端に相当すると考えられる。高瀬神社の造宮にあたり、墳丘東側はかなりの削平を受けたものと思われる。

南側に設定したT3の所見では、墳丘地表面は古墳中央から緩やかに下り、中心から10.6mの位置で傾斜を変えて平坦面に移行するので、本トレンチでは盛土末端部と流土の区別が明確でないが、この位置が南墳端と判断される。

西側に設定したT4では立木のため墳端に相当する部分の発掘ができなかったので、T6とT7で補った。その結果、中心から9.4m西の位置で墳端を把握できた。

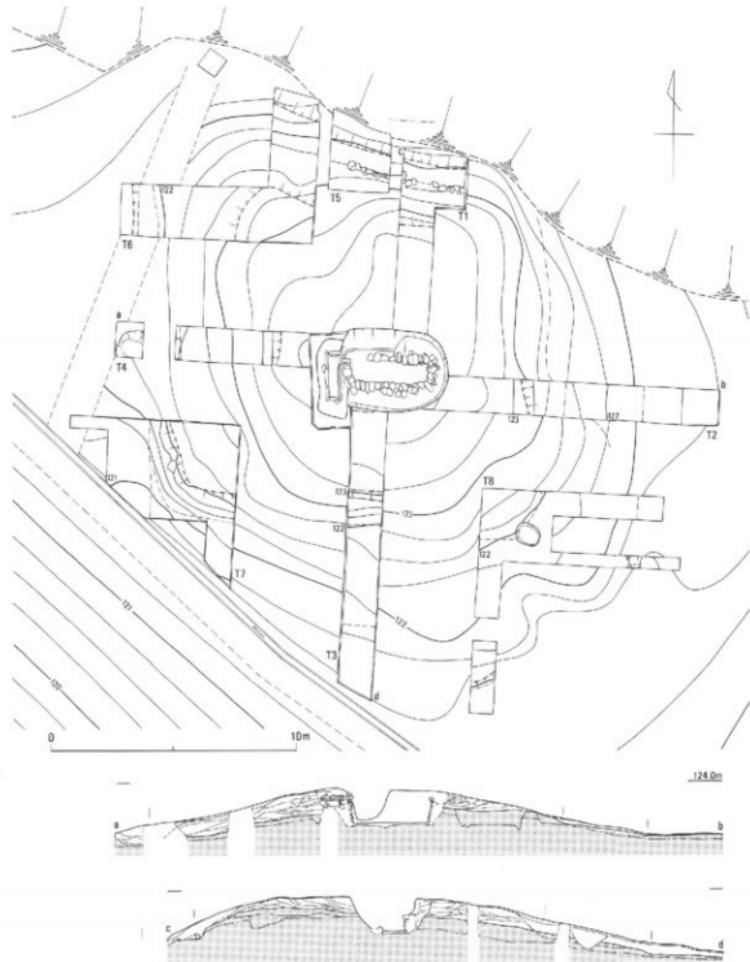
北側のT1では中心から8mのところに東西の石列を検出した。調査当初、これを北側墳端線と認識したが、調査区を拡張して石列の広がりを追求したところ、石列はやや内窪していて、墳丘南斜面の一部にしか存在しないことが判明した。その後、古墳に先行する墓塚と思われる遺構が各調査区の下層で検出されたので、この石列はそれらに伴うものであると考えられる。これらのことから北側墳端は崖の崩落によりかなり浸食されているものと思われる。

各調査区の所見では、墳丘盛土の厚さは1m以上あり、墳丘中央の外側から土盛りされた状況が認められた。以上のことから墳丘は、東西19.9m、南北推定20.4mの方墳であると判断される。葺石や埴輪などの外表施設は認められない。

中心埋葬主体(第7-8図) 東西に主軸をもつ竪穴式石槨で、墳丘造成後、古墳のほぼ中央に東西4.5m以上、南北3.4m、の楕円形の墓塚を掘り、幅20cmから70cmの河原石を使用して構築している。後に箱式石棺が西側に隣接してつくられているので、本来の墓塚の規模は、東西5m程度に復元できる。石槨基底部における内寸は、長さ3.07m、幅は西側で0.8m、東側で0.9mをはかる。最下段に大形の石材を多用し、平面形は四隅の明確な長方形である。

大きく盗掘を受けた櫛内からは測定の過程で、溶結凝灰岩の大形の扁平な角礫(板石)が多数落下した状態で検出された。石槨の西側に隣接する第2埋葬主体の箱式石棺にも同質の凝灰岩が使用されているが、石槨の東半部からも板石の出土をみたので、これらは天井部の開塞に使用された可能性が高い。つまり、壁体は河原石を使用し、天井部の覆いだけに板石を用いた構造と思われる。

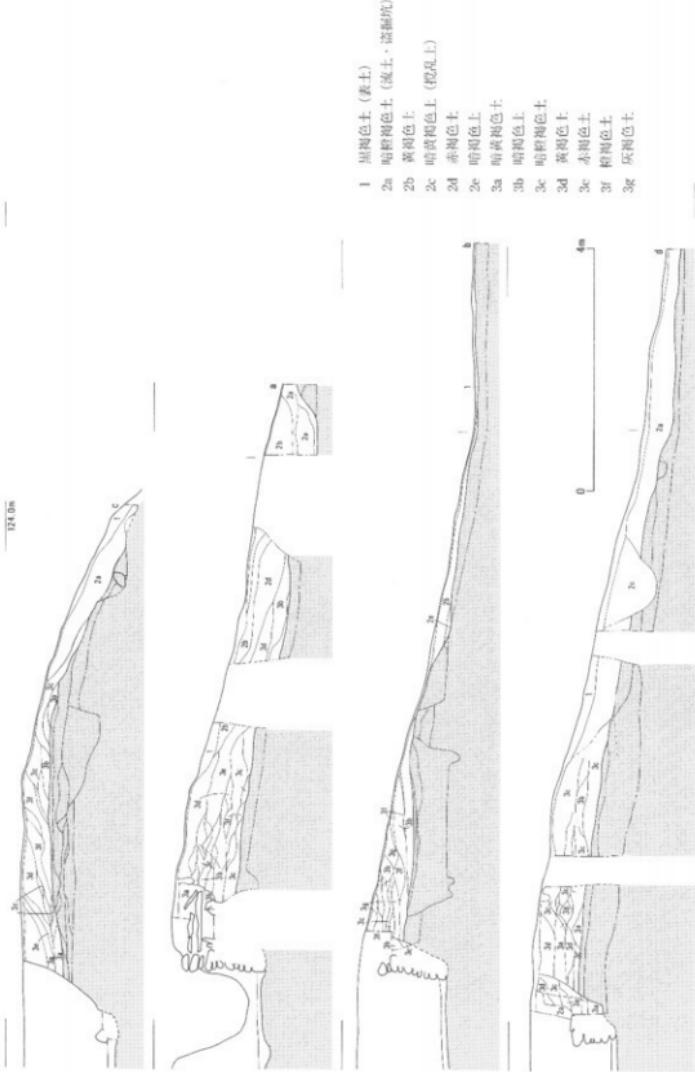
壁面は基本的に直立していて、顕著な持ち送り積みは認められない。石槨の構築は、下から3段目までは比較的そろった大きさの石を緻密と積んでいるが、それ以上はやや小ぶりな石を多用するほか、積み方にやや乱れが生じている。北壁の東側下段の基底部の積み方が不規則な点が注意される。

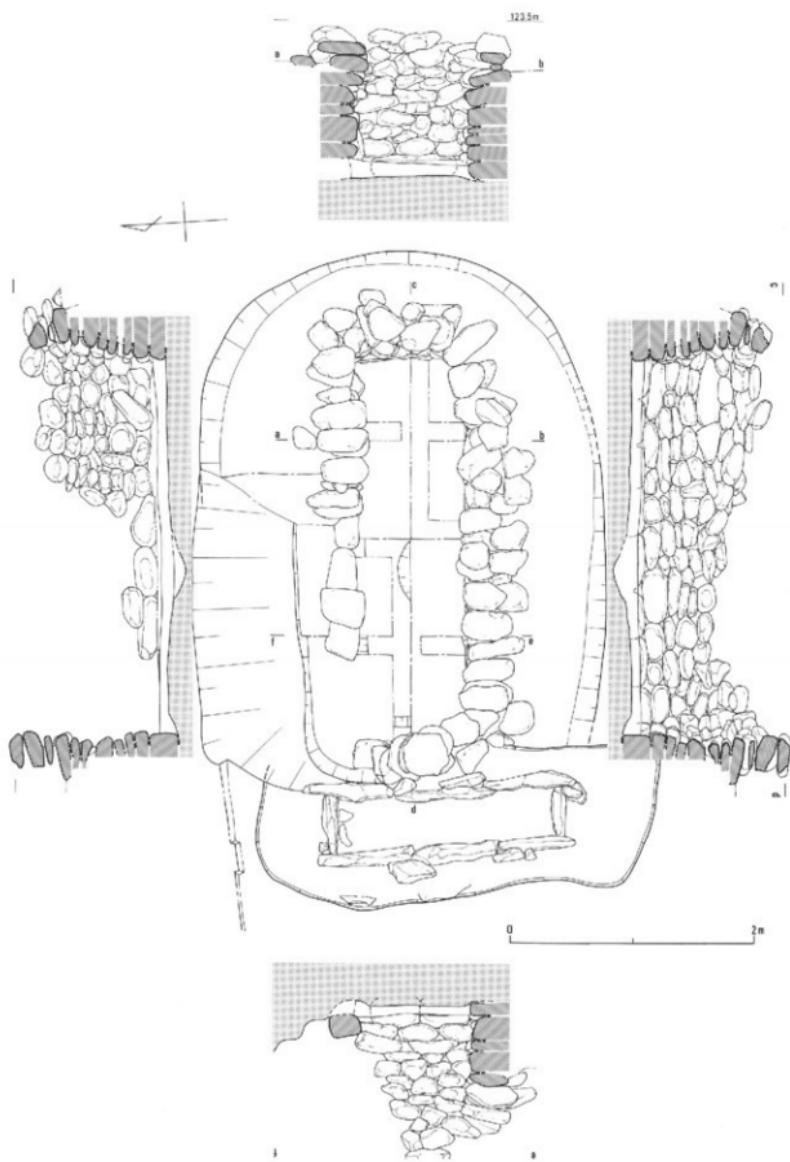


第5図 1号墳全体図(1:200)

墓域の底は地山に達していて、ほぼ平坦だが、中央に不整な落ち込みが認められるほか、最下段の石積み箇所はやや深く掘られていた。桿内には厚さ約10cmの置き土が認められた。石櫛北壁の最下段の石はその置き土の上に位置するので、石櫛の構築工程は、墓塚を掘り込んで最下段の石の配置作業の過程で桿内に置き土がなされたと理解される。盜掘のため桿内から木棺の痕跡は検出されなかったが、木棺は置き土の上に直接置かれたものと考えられる。石櫛東側の置き土上面から鉄錐片1点が出土したほか、器種不明の笠1点が盜掘排土中から出土した。

第6图 1号桥墩正断面图

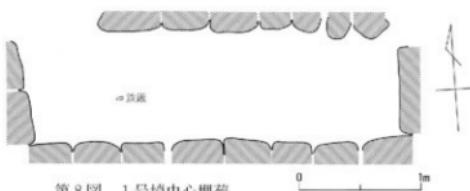




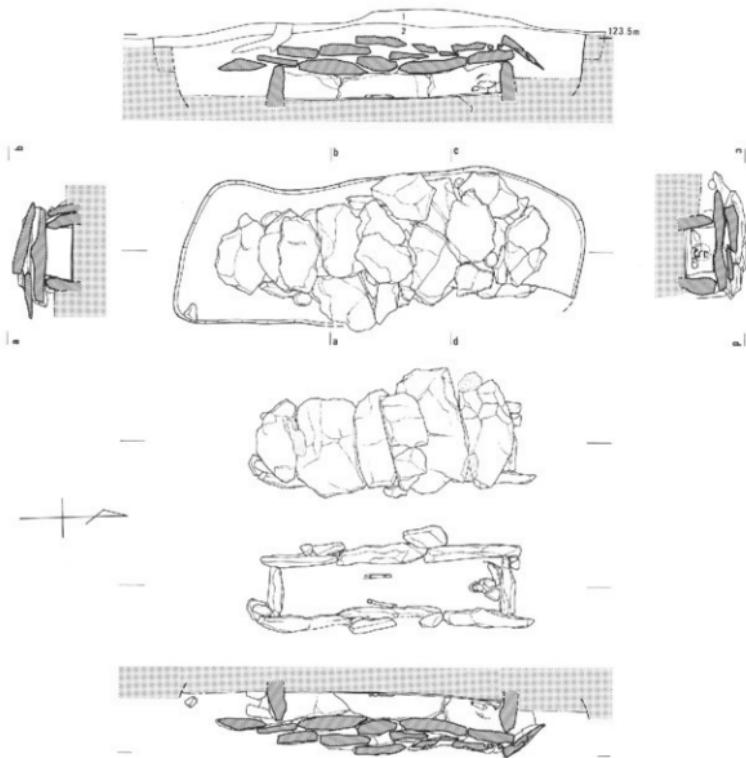
第7図 1号墳中心理墓主体実測図 (1:40)

第2埋葬主体(第6-9図) 中心埋葬の石槨西壁に接して、主軸を直交して位置する。南北3.2m、東西1.1mの墓域に長さ2.26m、幅0.7mの箱式石棺を構築する。側石はそれぞれ3枚の板石からなり、側石で小口石を挟む形式のものである。5枚の板石で棺身を封じた後、さらに約10枚の板石を用いて覆った丁寧な造りである。棺身と蓋石との接合部や蓋石同士の隙間には粘土をつめていた。

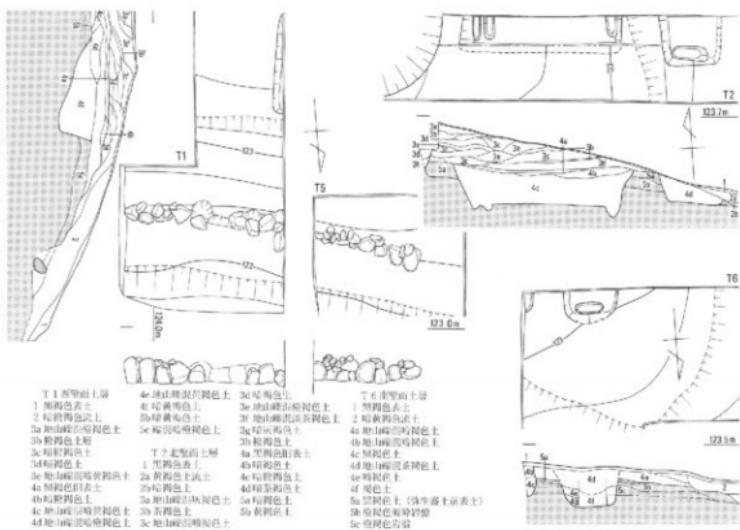
石棺の内法は、長さ1.77m、幅は北側小口部で0.44m、南側小口部で0.39mを測る。棺底部には砂が敷かれていた。棺底から蓋石までの高さは0.2m強である。棺内の北側小口付近に円錐2個をもちいた枕が据えられ、人頭骨1体がその上に載っていた。棺中央には左右の大腿骨が遺存する程度で、遺



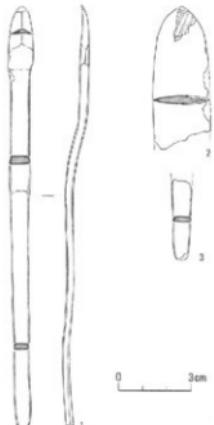
第8図 1号墳中心埋葬



第9図 1号墳第2埋葬主体実測図 (1:40)



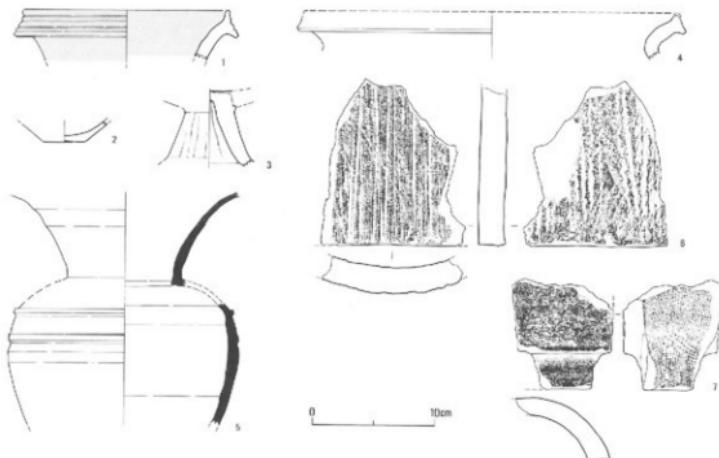
第10図 1号墳下層遺構実測図(1:80)



第11図 1号墳出土鉄器実測図(1:2)

T1の北部で検出した石列は、この土壙墓群に伴うものと判断され、墓域を画する施設であると考えられる。石材はすべて円錐形で、基本的に1列に立てた列石の状態を示す。円錐の高低差を調整する目的で部分的に小砾を積み重ねた部分も認められ、高さは約40cmを測る。検出したのは東西5mで、西端はT5で終わり、T6には続かない。東端は未確認である。

これらの状況から、東西約18m、南北推定15m程の弥生時代後期の方形墳丘墓が存在し、1号墳はその上に築造されたものであることが判明した。



第12図 1号墳出土遺物実測図 (1:4)

遺物(第11・12図) 1号墳に伴う遺物は、第11図に示した3点の鉄器である。1は第2埋葬主体出土の鉢で、長さ17.2cm、身部幅0.9cm、刃部幅1.1cm、厚さ0.3cmを測る。先端をわずかに欠損している。2・3は中心埋葬主体出土で、2は鉄鎌の先端部である。長さ5.8cm、厚さ0.4cm。3は器種不明の鉄製品で茎とみられる。

第12図1-4は、下層造構に伴ったとみられる弥生土器である。1・2は中心埋葬主体の裏込め土から出土し、3はT7の盛土中から、4はT2の墓壙から出土した。1は壺形土器で丹塗り、2は壺あるいは鉢形土器の底部、3は高環の脚台部で外面は縦方向のヘラミガキを施す。4は鉢形土器の口縁部と思われる小片で、器肌荒れのため判然としないが丹塗りの可能性がある。このほかにも、各トレンチの埴丘流上中あるいは盛土中から数点の弥生土器片が出土している。これらは、いずれも弥生時代後期後半に属するものとみられる。

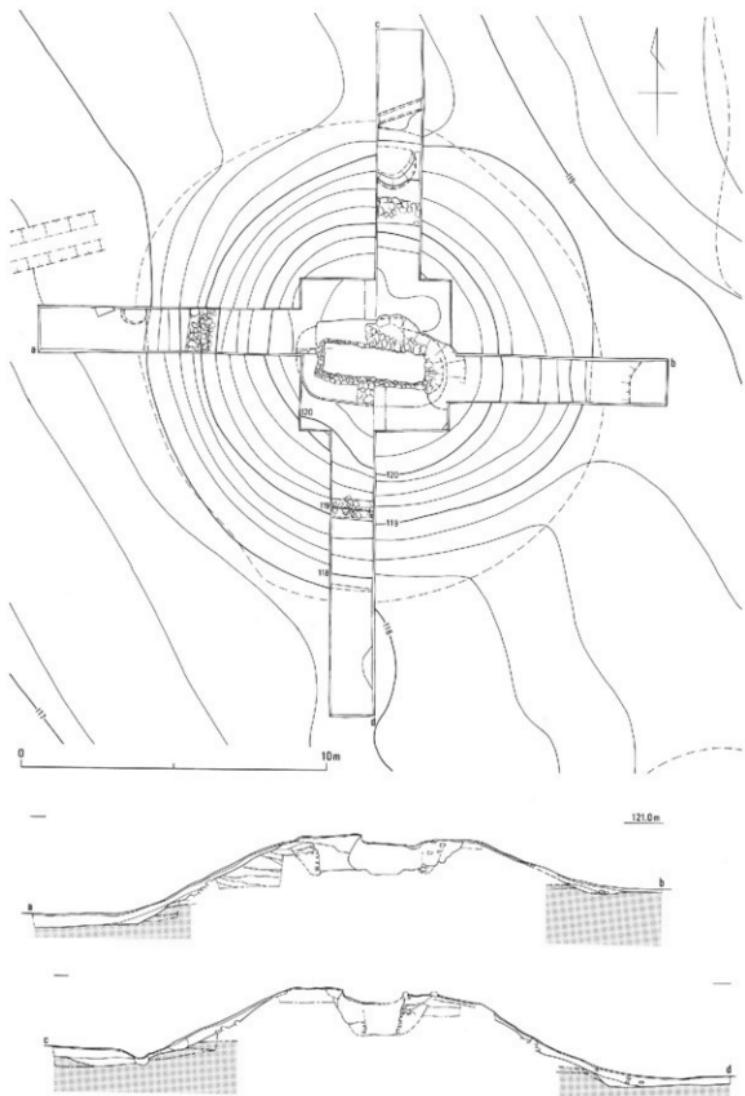
埴丘流上中からはその他に瓦片が出土した。6・7はその代表で、T7の流上中から出土した平瓦で、裏面は平行する荒い繩目叩き調整で多量の離れ砂をとどめる。須恵質焼成。7は瓦質焼成の丸瓦片である。表面にはナデ調整を加える。図示したほかに11点の瓦片が各調査区から出土したが、そのうち2点は近世に属するもので、他は古代末から中世のものと思われる。

5は須恵器の壺で、断面台形の突帯を肩部に2条めぐらせる。勝間田焼に類例がある。上記の瓦に伴うものであろう。

### 3. 6号墳

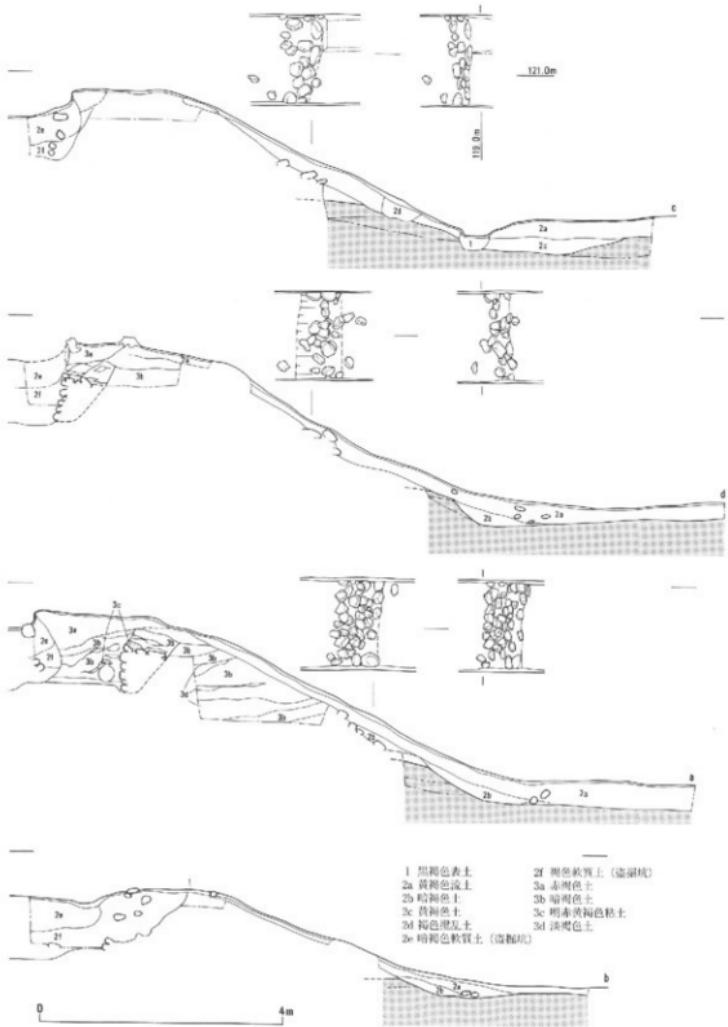
古墳密集部の北辺に位置する円墳で、丘陵中央部の最高所からわずかに南西に下った緩斜面に存在する。南方に12、13、11号墳が、東に5、7号墳が位置する。

丘陵中央の南北道路を挟んだ、耕作に伴うとみられる東西方向の小溝が埴丘の北端を通過している。また、埴丘西端部には北から延びる架高式の農業水路がかつて存在したが、現在は水路は破壊され、



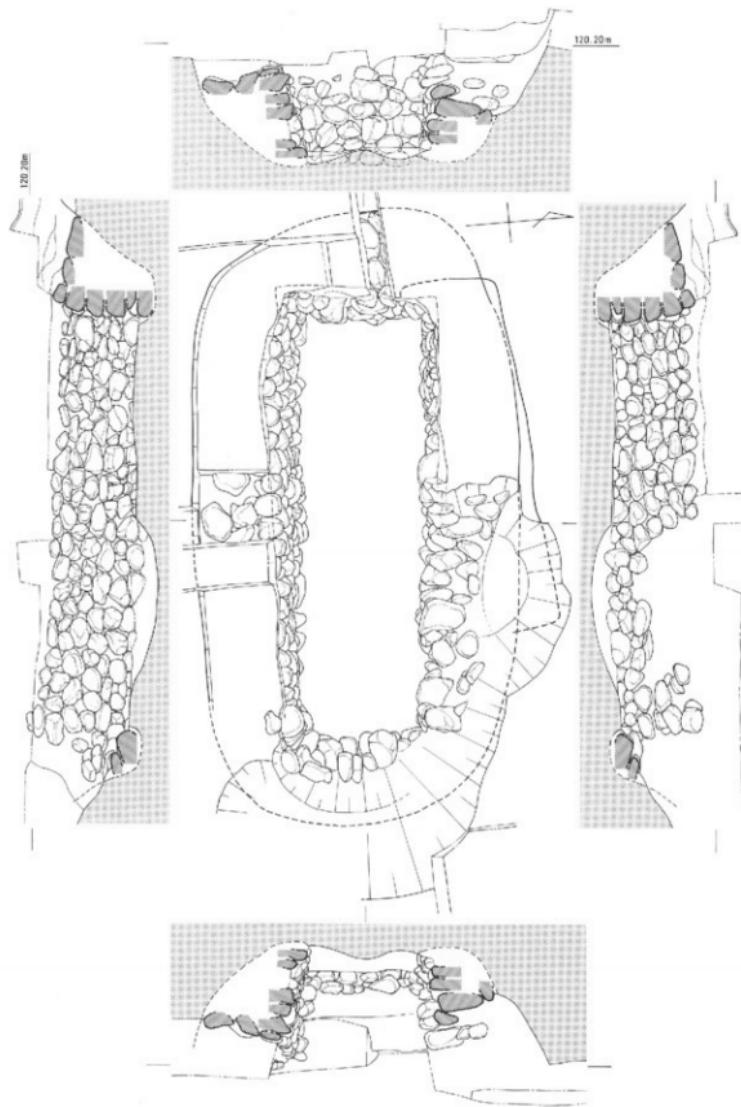
第13図 6号墳全体図 (1:160)

地下に埋設した基部を残すだけとなっている。現在、古墳の北側と西側は人工林となっているが、かつて畠地として耕作された痕跡が認められる。墳頂部に東西方向の2基の埋葬施設を検出した。

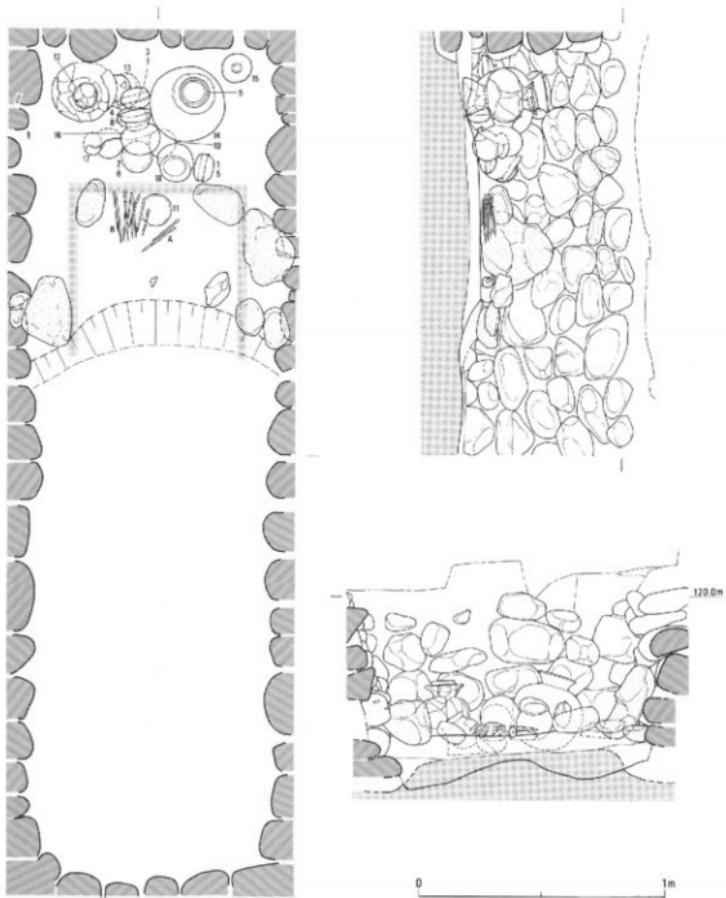


第14図 6号填丘断面図 (1:80)

填 丘(第13・14図) 国土座標に沿った東西南北のトレンチを設定して填丘規模等の確認を試みた。発掘前の測量段階では南北15.7m、東西15mを測ったが、発掘の結果南北15.2m、東西14.4m、高さ3.1mの填丘規模であることが判明した。填丘の北側と東側に浅い溝状の落ち込みがみられる程度で、明確な周溝は認められない。



第15図 6号墳中心埋葬主体実測図 (1:40)



第16図 6号墳中心埋葬主体出土状況 (1:20)

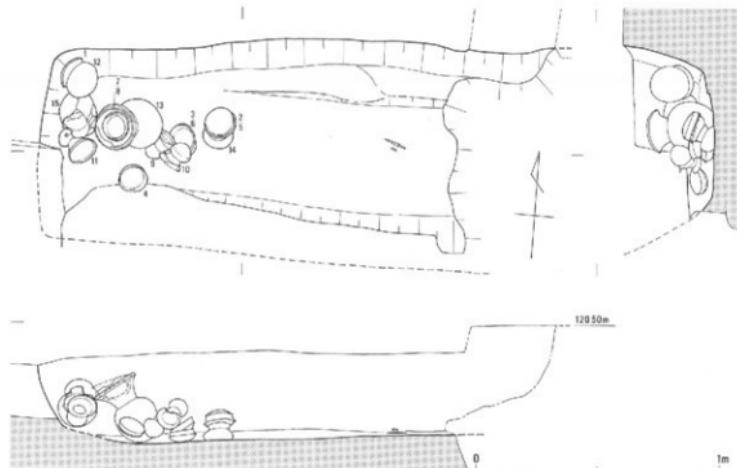
埴丘中段に葺石を這らせている。葺石は径20cm内外の河原石をもちいたもので、西および南北トレンチに遺存していた。東トレンチでは保存状況が悪く、河原石が埴丘斜面下方に流れ落ちた状態で検出された。最も保存状態の良い西トレンチの所見では、葺石は5、6段に構築されていて、葺石下端から外に幅約0.6mの平坦面が存在する。つまり、埴丘は2段築成となっていて上段の下部に葺石が這る構造となっている。各トレンチの埴端付近を中心としてかなりの数の転落した河原石が検出されたが、葺石は埴丘上段をすべて覆っていたのではなく、西トレンチにみられるように幅0.8m程の鉢巻状のものと考えられる。

埴丘斜面から下方に円筒埴輪片が各調査区で出土した。葺石上端やそれ以上の位置からも出土した

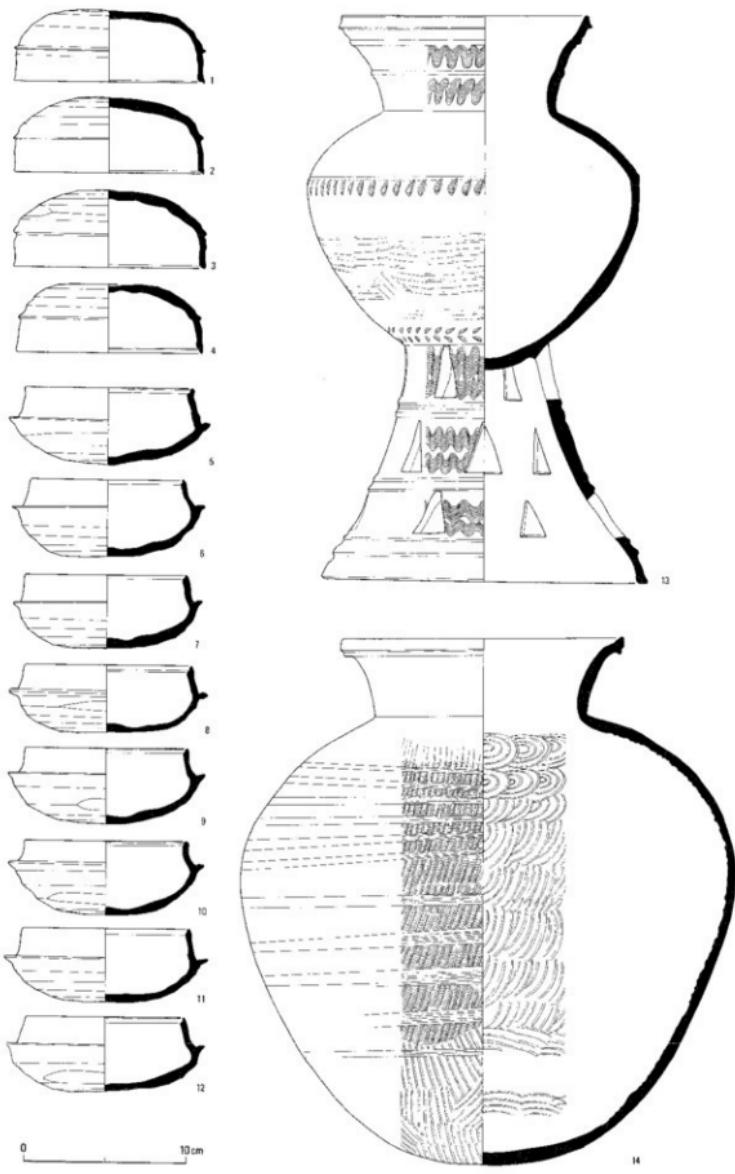
ので、埴輪は埴頂部の周辺に樹立されていたと考えられる。

埴丘下段の大半は地山削り出しで、西トレチの所見では盛土は埴丘外側から順次築造されている。中心埋葬主体(第15-16図) 長軸を東西に向けた竪穴式石槨で、北壁面の東半部と南壁は過去の乱掘により基底部以外は遺存しない。長さ5m、幅2.7mの墓壇内に、基底部の内寸で長さ3.35m、幅約0.95m、高さ約0.7mの壁体を河原石を使用して構築する。河原石はやや小ぶりで、持ち送り積みは認められず、むしろ上方に向かっていくぶん開く傾向がある。石槨底面の平面形は、長方形にちかいが、東壁部は隅が丸みを帯びる。両端部の幅は、西側が0.93cmを測るのに対し、東側が1.0mとわずかに東側が広くつくられ、遺物出土状態とあわせ、遺骸頭位は東とみられる。天井石の存在を示す石材は全く認められなかった。いっぽう、壁面最上段の河原石の上端はほぼ水平に近く整えられており、これらの石の上には槨内側から約10cmを除いて、外方に厚さ5cm内外の粘土層の広がりがみられた。また槨内西半部の底面近くでは落下した同様の粘土層が認められた(第14図)。このことから、本石槨には木蓋がもちいられたと判断される。板材の枚数等は不明だが、おそらく南北に厚さ5cm程度の数枚の板材を渡して石槨を覆い、その周囲を粘土で封じたものと考えられる。こうした天井部の所見から、石槨の控え積みについては、サブトレチで部分的に確認するにとどめた(第15図)。

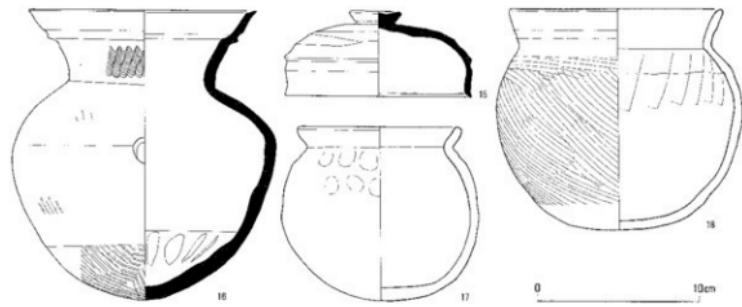
桿内は、乱掘により西側約3分の1強を残すだけであったが、石槨構築後、厚さ約7cmの置き土をして底面を形成している。精査の過程で、板材の痕跡と思われる幅7、8cmの黒色土帯が、第16回網板部分に検出された。桿の両側には側板の押さえとみられる河原石が置かれていたので、組合式の箱式木棺が使用されたと考えられる。桿内の西端には須恵器环身が1点伏せて置かれ、その横に束ねた鉄繩が添えられていた。その東よりから滑石製鉤錘車1点が出土した。桿外からは17点の土器と碧玉製管玉2点が出土した。管玉はいずれも底面から30cm程浮いた位置で出土し、石槨側壁に置かれていた可能性がある。



第17図 6号墳第2埋葬主体実測図 (1:20)



第18图 6号填心埋葬主体出土器物复原图1 (1:3)



第19図 6号墳中心埋葬主体出土上器長測図 (13)

第2埋葬主体(第17図) 中心埋葬の北側に位置する東西方向の木棺直葬墓。乱掘によって東側を破壊されているが、推定長3m、幅1m弱の墓域内に推定幅0.65cmの木棺を納める。棺内中央部の東よりの位置から刀子と碧玉製管玉1点が出土した。墓域の西側から多数の土器が出土した。これらのほとんどは棺外に置かれていたものと考えられるが、2・5・14については棺内の可能性もある。

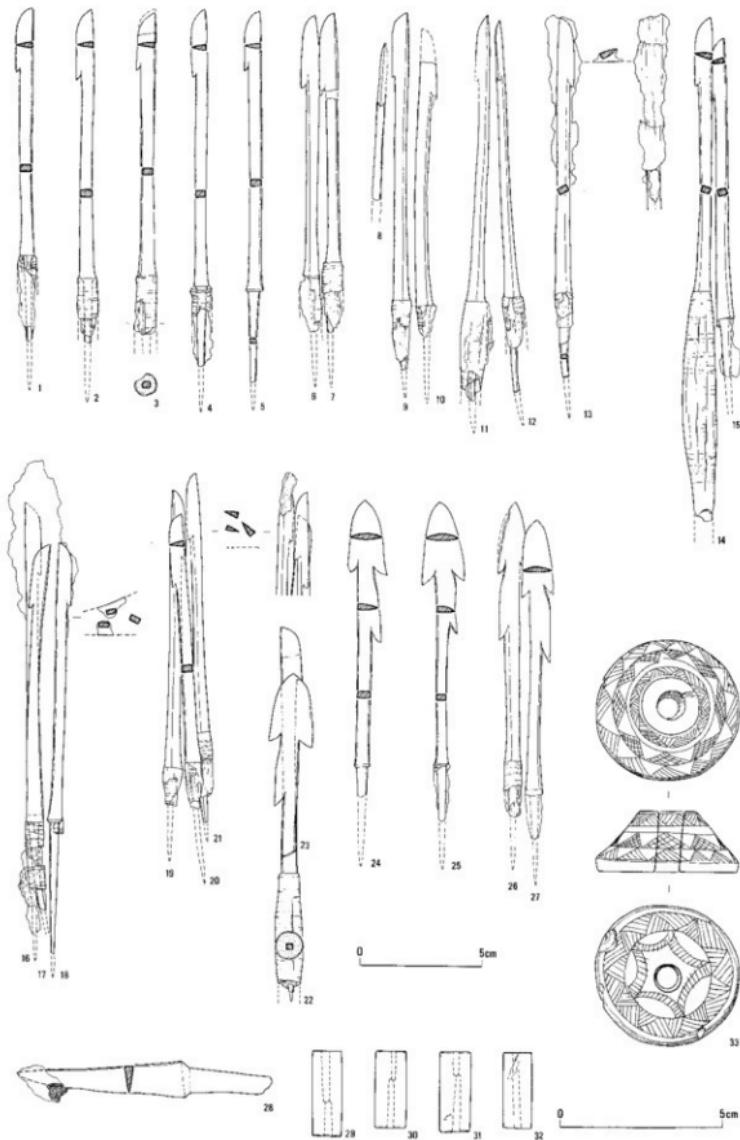
遺物 中心埋葬主体から須恵器16点、土師器2点(第18・19図)、鐵鎌27点、滑石製紡錘車1点、碧玉製管玉(30・31)2点(第20図)が出土した。

須恵器には环蓋(14)、环身(5・12)、高环蓋(15)、台付壺(13)、甕(14)、甌(16)がある。土師器は小形の甕(17・18)である。このうち、环は1と5、2と6、3と7、4と8が組み合って調節され、他はいずれも単独で出土した。棺外の須恵器の配列は、西に向かって左側奥に台付壺を置き、その口縁上に环身(12)を重ねる。向かって右側に甕を置き、やはり口縁上に环身(9)を重ねている。その右奥に高环蓋を伏せて置く。両者の間に环蓋环身1セット(4・8)を置く。その手前に环蓋环身のセット(2・6)を置いて、上に甌を重ね、さらにその口縁上に环セット(3・7)を重ねた可能性が高い。後者は、木棺の小口板に寄せかけて置かれていたとみられ、検出時には倒れていた。甌の両側には土師器甕を置く。

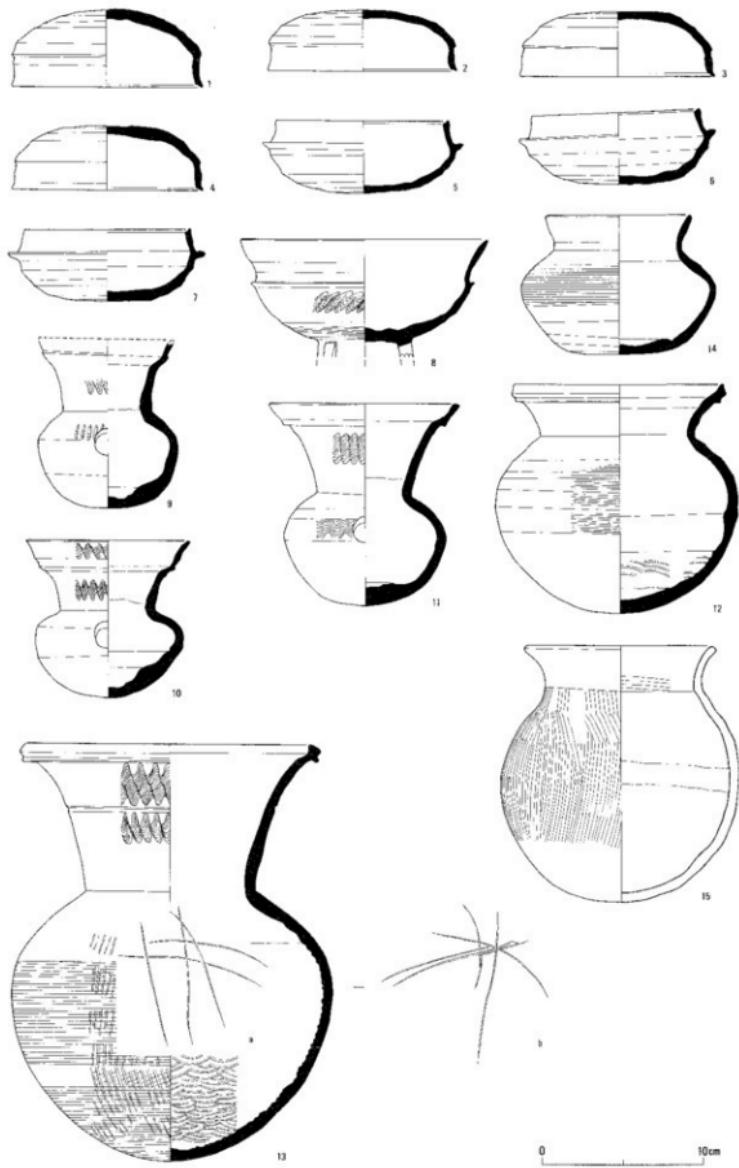
須恵器のほとんどは焼成の良好なもののほか、台付壺のみは焼成が甘く、脚台部の保存状態が良くなない。环類の口縁部にはいずれも明確な面あるいは段をもつ。环蓋の寸法は口縁部径が11.5cm、器高4.5cm前後に、环身の寸法は口縁部径10cm、器高4.5cmにほぼ集中する。环身底部および环蓋天井部の回転ヘラ削りの方向はいずれも逆回り(逆時計回り)に削る。

土師器甕は口径9.7cm、器高10.7cm(17)の小形品と、口径が12.9cm、器高13.7cmのもの(18)がある。この時期の埋葬に特徴的に用いられたものとして興味深いが、いずれにも煤などの火を受けた痕跡は認められない。上記の上器以外に中心埋葬に伴った可能性のある上器が、乱掘坑の埋土中から出土した(第22図16・19)。すべて破片で、环蓋(16)、甌(17)、有蓋高环脚台部(18)、短鉗壺(19)がある。

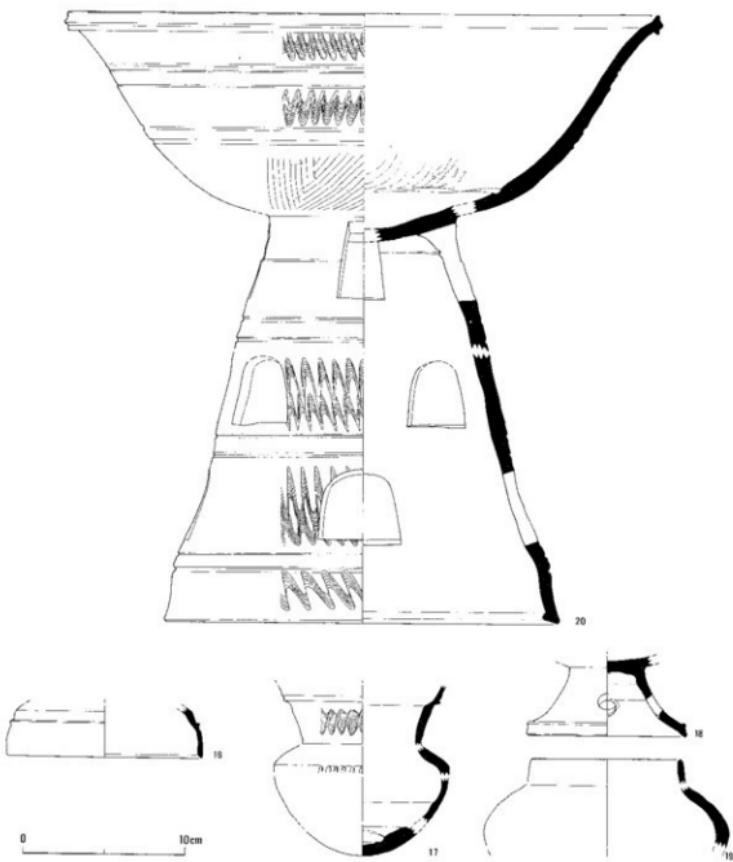
鐵鎌はいずれも長頭鎌で、片刃のA類(1-22)と、両刃で刃部の下に片刃の逆刺を加えたB類(23-27)とがある。いずれも矢柄との着装状況が良好に観察できる。いくつかの鎌には棺材と思われる木質が付着し、16-18には上下両面に認められる。紡錘車は、側面形が面取りを施した台形で、使用の際の上面にあたる側には中央に二重の重弧文を5単位施し、内部を斜線文で満たす。さらにその外部に複合鋸闇文を施す。裏面には3段に锯闇文を刻んだ丁寧なつくりのものである。管玉(30・31)は一部に緑目がみられるものの、暗緑色の良質な碧玉製である。



第20图 6号陪出土遗物实测图 (12, 23)



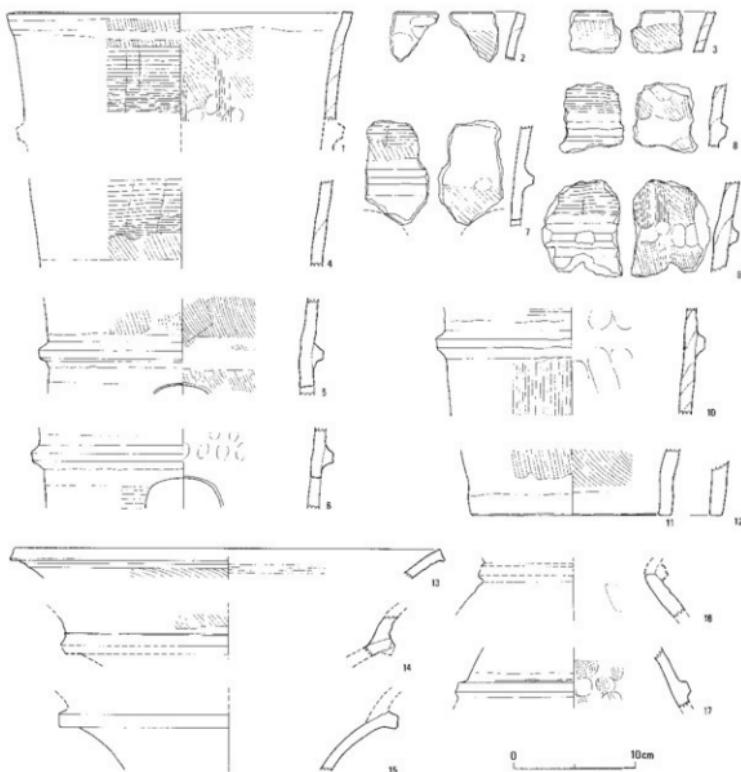
第21圖 6號墳第2墓葬主體出土上蓋測圖 (1:3)



第22図 6号墳出土土器実測図(1:3)

第2埋葬主体からは、須恵器13点、上飾器1点(第21図2-15)、碧玉製管玉(第20図32)1点、鉄製刀子1点(同28)が出土した。なお、第21図1の壺蓋は中心埋葬の上層埋土である赤褐色土層から出土したもので、本埋葬に由来するものと思われる。

須恵器には壺蓋(1-4)、壺身(5-7)、無蓋高壺(8)、短頭壺(14)、短頭広口壺(12)、広口壺(13)、扈(9-11)がある。1以外はすべて墓壇西端部に置かれていたもので、広口壺の上に脚台を除去した無蓋高壺を載せ、さらに壺蓋(7)を重ねていた。広口壺の東側には壺身(6)を置き、上に壺蓋(3)を逆転して重ねた上に縁を截せた状況がうかがえた。柄内副幕の可能性がある短頭壺の上には壺セット(2-5)を配していた。広口壺には肩部の前後両面に直線を組み合わせたヘラ記号が刻まれている。広口壺の焼成はやや甘く、扈はいずれも焼成不良で灰白色を呈する。他は焼成良好。



第23図 6号墳出土埴輪実測図(1:4)

須恵器壺類の口縁部には明確な端面あるいは段を形成する。壺蓋の寸法は口径11.7cm、器高4.0cm前後、壺身は口径10.0cmから10.5cm、器高4.4cm前後を測る。中心埋葬主体出土壺類に比べ口径の増大、器高の減少がわずかながら認められる。また、壺蓋肩部の突出部および回転ヘラ削り部分の減少の傾向も同時に観察された。

以上の埋葬施設に伴うもののほかに、若干の遺物が出土している。須恵器器台(第22図20)と甕がある。甕台は第2埋葬の墓域西半部の表土直下から出土したもので、第2埋葬主体の埋葬終了後、埴頂に置かれたものである。甕は東側埴端付近から小破片が出土した。御玉製管玉(29)は第2埋葬主体の北側表土から出土した。乱掘の際に掘り出されたものと考えられる。

**埴輪(第23図)** 墓丘の四方に設定したトレンチの、埴丘斜面から埴端にかけての流土中から埴輪が出土した。全体でコンテナ1箱程度、いずれも小破片で全形を示す資料はないが、赤褐色の埴質に

焼成され、黒斑は認められない。一部の内面は暗赤褐色を呈し、須恵質に近く堅く焼き締められている。

円筒埴輪は、直立しないしやや外方に広がる直径28cmほどの口縁部をもち、タガを3段に巡らせた形態と考えられる。スカシ穴はすべて円形で、おそらく二段目と一段目に2孔ずつ直交して穿たれていららしい。

ほとんどの破片の最下段を除く外面には、1次調整のタテハケのあとに2次調整のヨコハケが施されている。ヨコハケ原体は幅広のもので、器面の凹凸によって一部ヨコハケが施されない箇所も存在する(4)。このため、一見ヨコハケを欠くように見える少數の個体(5)についても、これが本米の姿かどうか不明である。ヨコハケは向かって右から左側に施され、何度か停止したかすかな痕跡が多く個体で認められる。逆に、こうした静止痕を残さないC種ヨコハケの確実な例は認められない。

内面の調整は、タテハケのものと指ナデのものとがある。口縁端部にはヨコナデを施し、やや内寄する端面を形成する。

タガは、あまり高くはないが、しっかりした台形で、最下段のタガに押圧技法は認められない。

#### 4. 14号墳

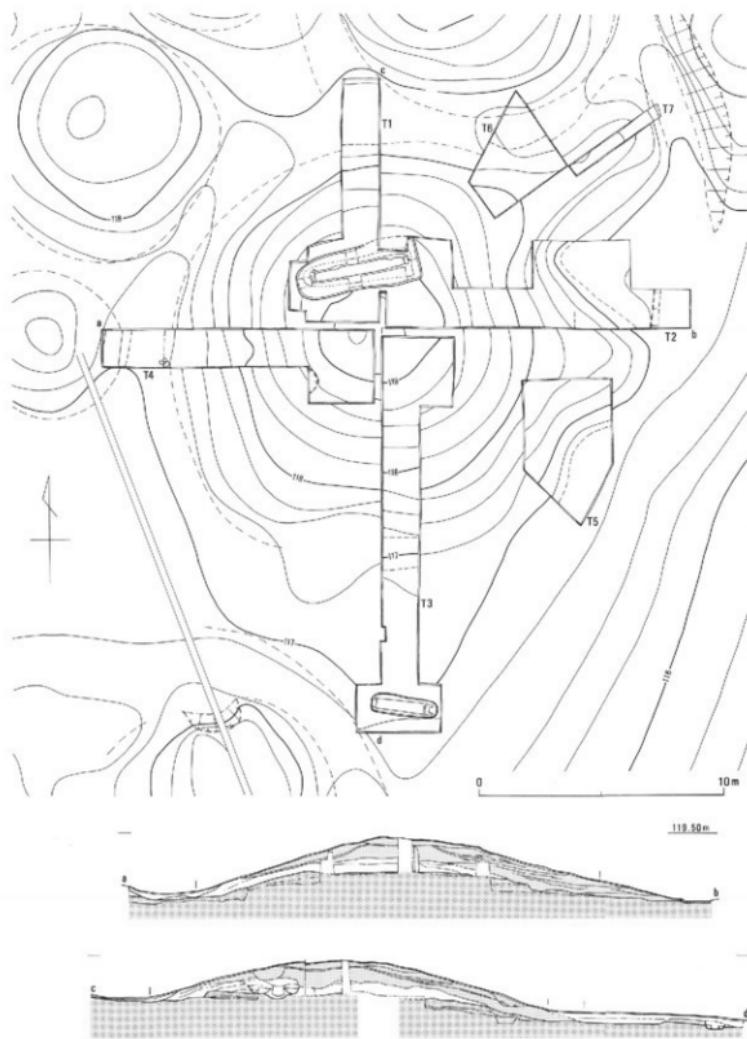
丘陵中央の最高所からやや南に下った尾根筋上に位置する。墳丘は後世の改変が激しく明確でないが、東西16.6m、南北16mの方墳であったと考えられる。西側から時計回りに15号、13号、11号、10号、9号墳が、墳丘北半部を取り囲むように存在していて、これらの小円墳に先行するとみられる古墳で、南方には少し離れて16号墳が位置する。古墳密集部のなかでも最良の地点に存在する比較的大形の古墳で、やや特異な形態をもつ。

墳丘(第24-25図) 測量段階では径約18mの円墳と思われた。墳丘の東側と北東側には突出部が認められ、この性格の理解も調査目的のひとつとして、まず四方に直交するトレンチを座標に沿って設定した。これらのトレンチで、おもに墳端の把握につとめた。北側のT1では墳丘中心から北に7.8mの位置に、西のT4では中心から8.2mの位置に墳端を確認できた。

T2は東側突出部のやや北寄りを断ち割る位置に設定し、突出部の築成状況の把握を目的とした。調査当初、中心から11.5mの位置、ほぼ地表部の傾斜変換線近くに「墳端」を想定した。同様に南トレンチのT3では中心から南に9.9mの位置に「墳端」を検出した。したがって、東突出部は墳丘築成時に形成されたと判断された。その後、墳頂部の掘り下げが進むとともに、両者の「墳端」は新しく形成されたものであることが判明した。

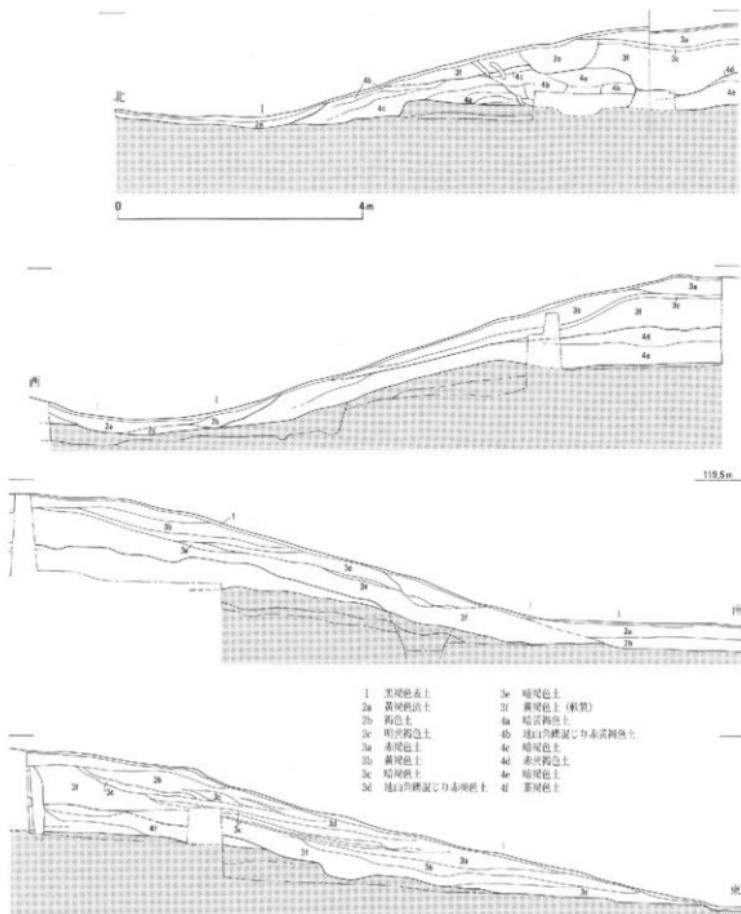
墳頂部の発掘は、立木のため調査畦を撤去せずに進めざるをえなかったが、各区で地山まで墳丘の断ち割りをおこなった。その結果、盛土は上層の3層群と下層の4層群に分かれることが明らかとなった。3層群は地表から0.9mまで、墳丘盛土全体のほぼ3分の2を占める(第24図上層網版部分)。これに対し、4層群は地山からの厚さ0.5mをはかるにすぎない。3層群中からは中世土器や瓦等が出土し、後世の土盛りであることが確認された。T2、T3にみられた「墳端」は、3層群の築成によって形成されたものである。4層群が本来の墳丘であって、4層群の上面は凹凸が激しく、後世の土盛りに先立ち墳丘が大きく破壊されたことをがたっている。T2およびT3における本来の墳端の位置は、墳丘の徹底的な掘削によって判然としないが、地山傾斜面の変化からみて、T2、T3とも中心から8mの位置に推定される。

したがって、東側突出部については後世の成形であることが判明した。北東の突出部の調査区では



第24図 14号墳全体図 (1:200)

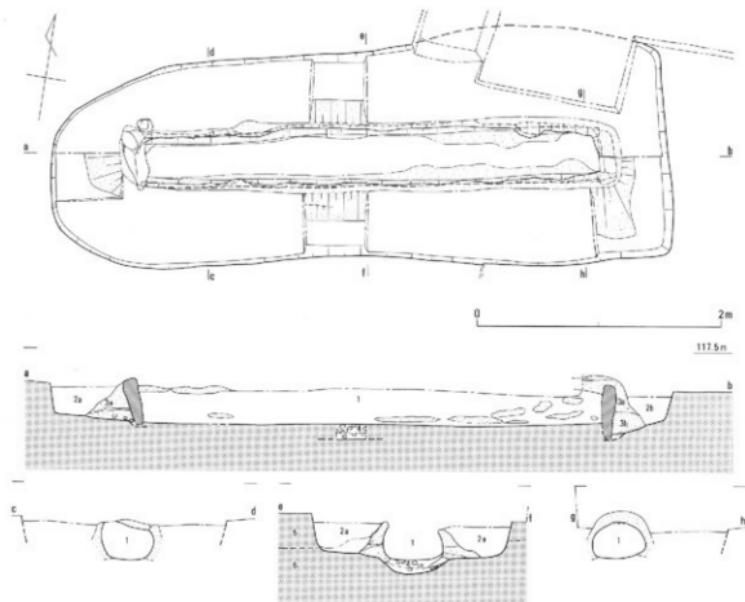
遺物の出土を見ず断定できないが、3層群と同様の軟質土層で形成されていることからみて、やはり後世につくられた可能性が高い。本来の墳形は方墳であった可能性高く、現状で認められる西側から北にかけての弧状の墳端ラインは、周辺の円墳築造時に形成された可能性もある。T4の西半部では地山中に弥生時代住居址の一部を検出したほか、西端部で15号墳の墳端を検出した。



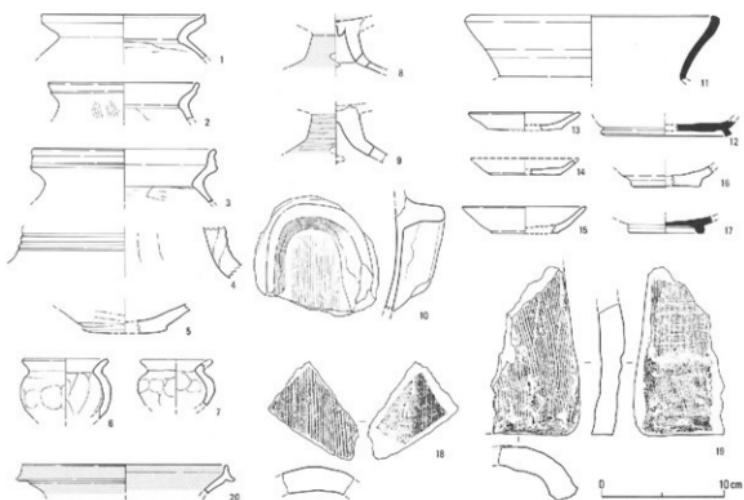
第25図 14号墳埴丘断面図 (1:80)

**埋葬主体(第26図)** 墳頂部のかなり北寄りの位置で、4層群上面で主軸を東西に近く向けた粘土櫛を検出した。墓壙は東西5.0m、南北1.8m程度で、東側が広くつくられている。墓壙の中央部の長さ4m、幅0.5mの範囲を一段深く掘り下げ疊床をつくり、その周辺に粘土を積み上げて粘土床を整形した後に割竹形木棺を設置し、粘土で覆う。木棺の外寸は長さ3.76m、最大幅0.46m。木棺の両小口は、扁平な河原石で塞いでいる。木棺幅は東端で0.46m、西端で0.40mと東側が広く、頭位方向は東と考えられるが、棺内からは赤色顔料等の痕跡も含め遺物は全く検出されなかった。

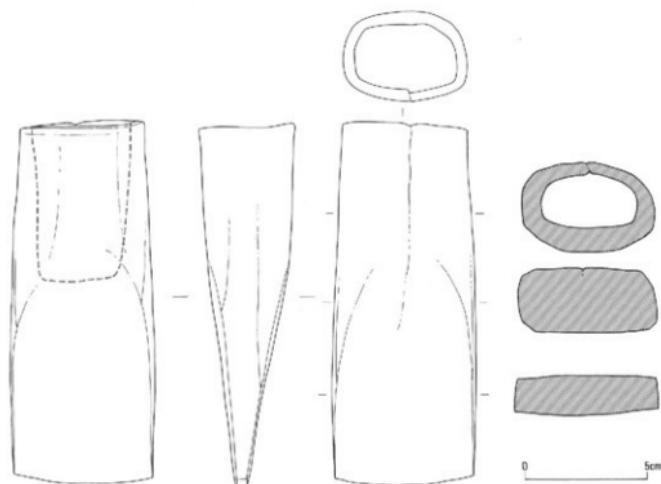
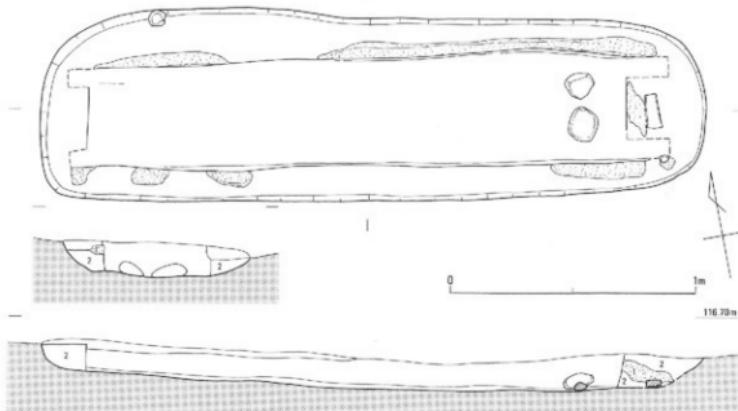
**遺物(第27図)** 本墳に確実にともなう遺物はない。1・3は土師器甕で、墳頂部の3層出土。



第26図 14号墳埋葬主体実測図 (1:40)



第27図 14号墳出土遺物実測図 (1:4)



第28図 14号墳外埋葬主体・鉄器実測図(1:20, 1:2)

2・4-10は弥生土器で後期後半に属する。11・12は奈良時代の須恵器で埴頂の搅乱坑から出土した。13-17は中世の土師器小皿、土師器环、須恵器碗で、小皿は底部をヘラ切りし、环は回転糸切り、碗は糸切り後、高台を貼り付けたものである。これらの多くは3層群から出土した。18・19は須恵質の丸瓦で、3層出土。

墳外埋葬主体(第28図) 14号墳南方の墳外で箱式木棺を1基検出した。墳端から約7m離れていて墳丘をもたない。古墳との関係は不明である。主軸をほぼ東西に向か、棺内東端に河原石を使用した枕

石を置く。棺の外寸は長さ約2.4m、幅0.47m。棺の周間に粘土を貼っている。棺の東小口外に鉄斧を副葬していた。

遺物(第29図) 長さ15cm、幅5.8cm、厚さ1cmの長方形の側面形をした有袋鉄斧である。乾燥重量は887gをはかる。鋸造品で袋部の折り返しの接合部は注意しなければ観察できないほど丁寧につくられている。刃部は使用のためか幅4mm程のやや偏った弧状をなしている。

墓壇上面から土師器が出土している(第27図20)。丹塗りの鉢形土器とみられる口縁部破片だが、本遺構に伴うかどうかは不明である。

## 5. 35号墳

古墳密集部のほぼ中央、西に向いた緩斜面に位置する円墳で、調査前の測量段階では直径9.4m、高さ1.6mを測り、斜面の上方には幅2~3mの周溝の存在が観察された。墳頂中央には乱掘坑が存在する。本古墳群を構成する小形墳の代表例として調査対象に選定した。

墳丘(第29図) 墳丘の中心から、国土座標方向に沿ったトレーニングを四方に設定した。発掘の結果、墳端位置は調査前の墳端推定線よりも概ね内側に位置していたが、東トレーニングでは逆に外方に位置し、墳丘規模は東西で9.4m、南北8.6mになることが確認できた。古墳は傾斜面にそって構築され、墳端線は等高線には一致せず、東西で0.7mの北高差がある。

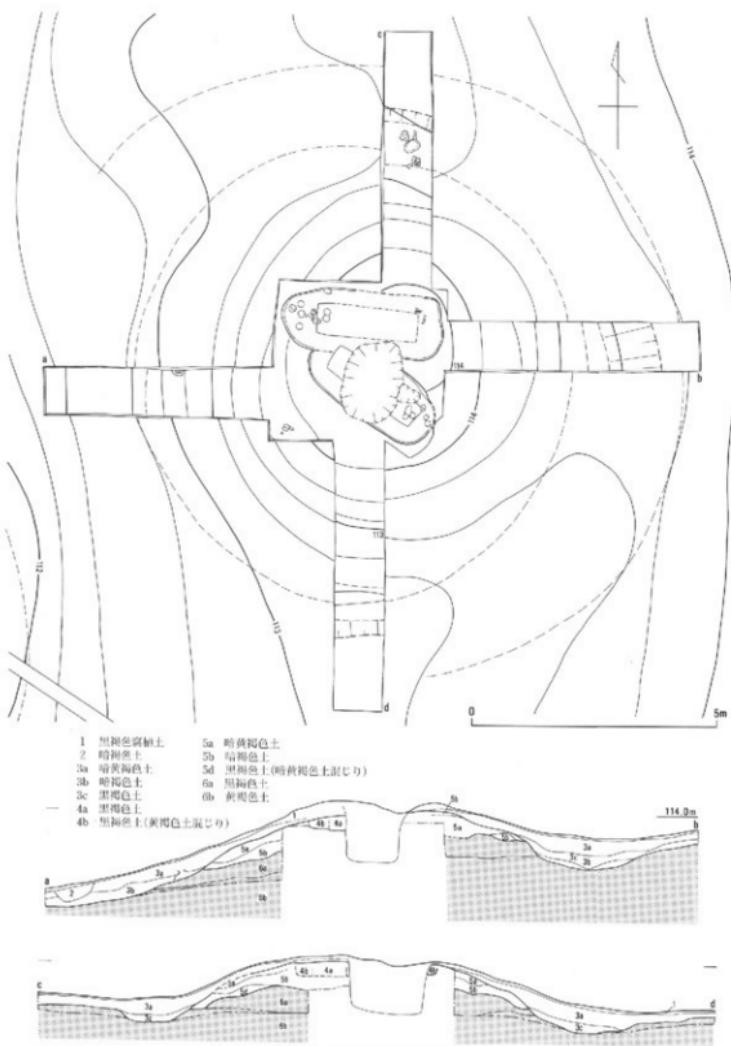
墳丘は、黄褐色土層(6b)と、その上に堆積した厚さ0.5mに達する黒褐色土層(6a)からなる地山の上に盛土をして形成される。いずれのトレーニングでも6b層まで斬ち割りを実施した。盛土層は比較的単純で、基本的に暗褐色土層(5b)と暗黄褐色土層(5a)からなり、ほぼその順に積まれている。このことから周溝部の掘削と並行して一気に墳丘を構築した状況が復元される。盛土および流土層からは多くの骨生土器が出土した。

西を除く3つのトレーニングで周溝の存在が確認された。墳丘盛土と地山の接線から、周溝外方の地山の立ち上がりまでの距離を周溝幅とするならば、東トレーニングでは2.5m、北で1.4m、南で2.2mの幅をもつ。北側の周溝中央から1個体の須恵器壺が破片となって出土した。溝底からは20cm程浮いており、径30cmの河原石1点が同時に出土した。この壺は墳丘斜面の流土中から出土した調査部破片と同一個体で、墳丘の上方から転落した状況を示す。同様に西トレーニングの墳端近くの北壁においても流土中から1個体の壺が出土したほか、もう1個体の壺の口縁部が墳丘流土から出土している。これらの壺は、しばしば指摘されるように、墳丘上での祭祀に伴うものと考えられるが、こうした墳丘下への落下や破損が人為的なものかどうかについては、部分的な発掘調査のせいもあり明らかではない。

乱掘坑の底は地山に達する。墳頂部の表土を除去した段階で須恵器の出土があり、2基の埋葬主体を検出した。墳頂調査区の南西隅近くのやはり浅い位置で須恵器壺破片が出土した。

南埋葬主体(第30図) 墳丘中央部に位置する、軸線を北西から南東に向けた木棺直葬で、中央部を乱掘坑によって大きく破壊されている。また、この乱掘坑から東方向に狐穴が掘られ、一部が損なわれている。墓壇は長さ2.9m、幅1.3mで、検出土面からの深さは10cm程度である。

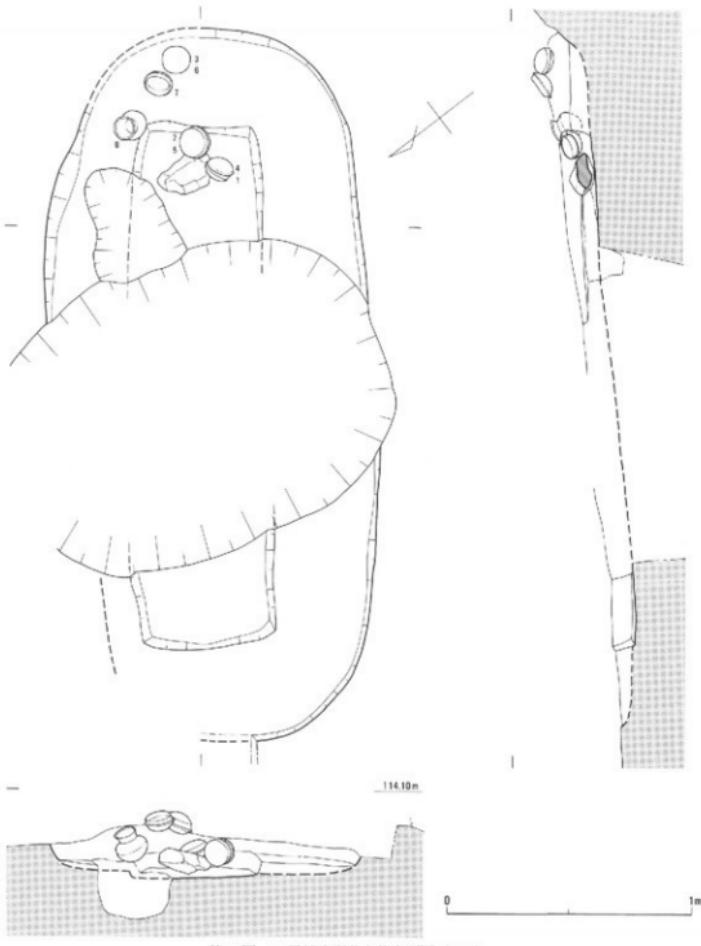
墓壇中央に箱式木棺と思われる痕跡を確認した。長さ2.15m、幅0.6m弱である。墓壇底は南東側がやや高く位置する。棺内の南東端付近に1点の扁平な河原石が置かれ、その周間に須恵器壺が2セット出土した。いずれも倒れるか、傾くかしてて、棺底からは浮いている。したがって、これらはもともと棺内に納められていたのではなく、棺上に置かれていた可能性も考えられる。



第29図 35号墳全体図 (1:100)

棺外からは、須恵器4個が出土した。壙1セットが墓域南東端に配置され、その内側に壙身1点が位置する。棺の北東隅に接して壙1点が置かれていた。

河原石は長さ24cmの比較的大きなもので、枕石として使用された可能性が高い。このことに加え、棺底の傾きも考慮に入れれば、遺骸の頭位方向は南東であったと考えられる。

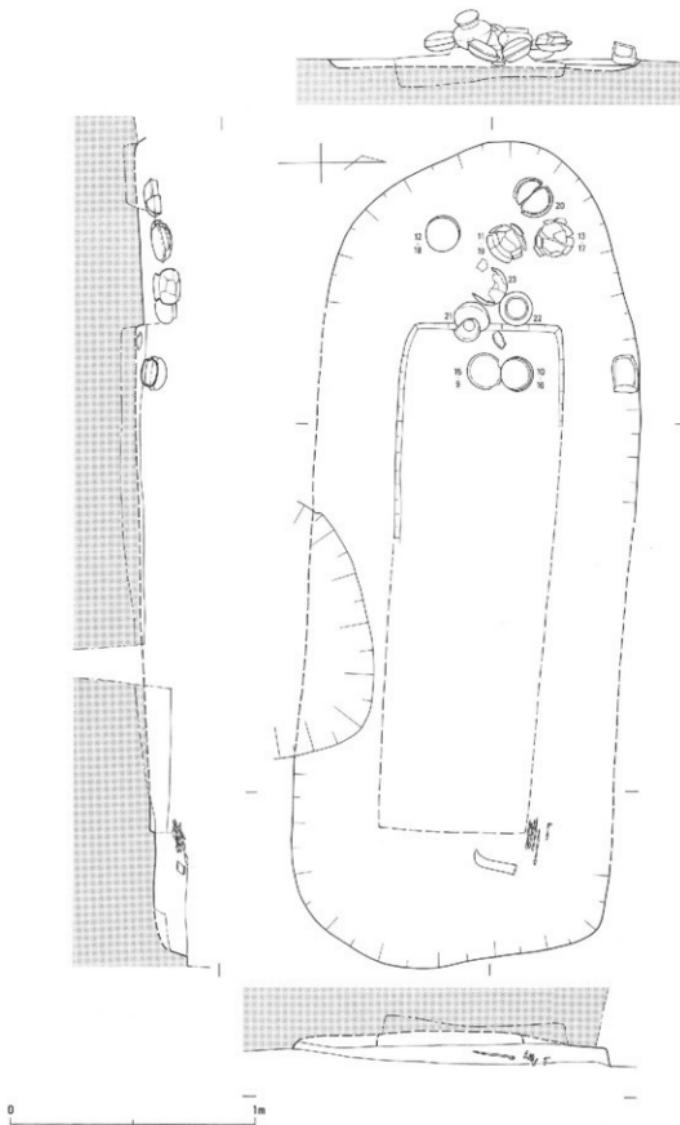


第30図 35号墳南埋葬主体実測図 (1:20)

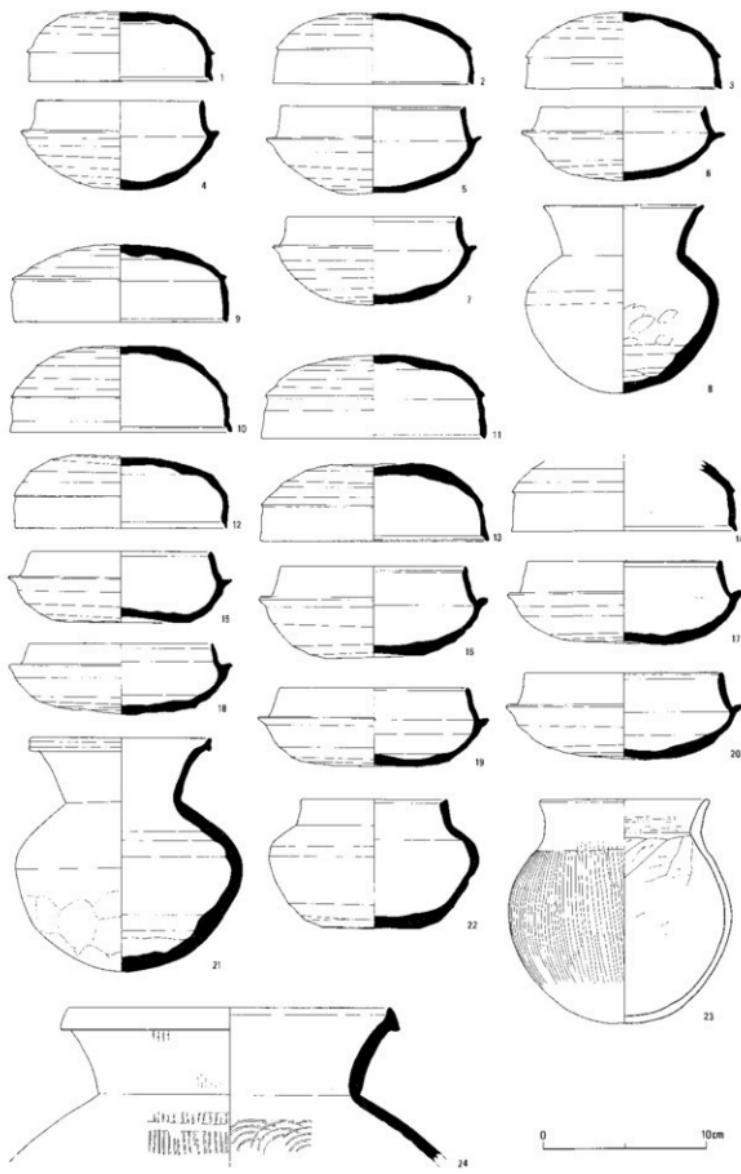
北埋葬主体(第31図) 南埋葬主体に一部重複した木棺直葬で、長軸をほぼ東西に向ける。墓壇は長さ3.4m、幅0.65mの規模で、検出面からの深さは10cm程度である。木棺痕跡は、西端部付近を除いてあまり明確ではない。墓壇東端近くに棺外遺物と考えられる鉄鎌や鉄鎌が副葬されていた。これらの位置関係から、棺の寸法は推定長約2.1m、幅0.66mと考えられる。

棺内からは環2セットが枕に転用された状態で出土した。このうち、南側の1セットは蓋身が逆転して使用される。棺の西小口外からは須恵器10点と土師器1点が出土した。このうち甕と短頸甕が小口板に接して、他はその外方に置かれていて、須恵器環3セット、环蓋1、土師器甕1がある。土師

114.00m



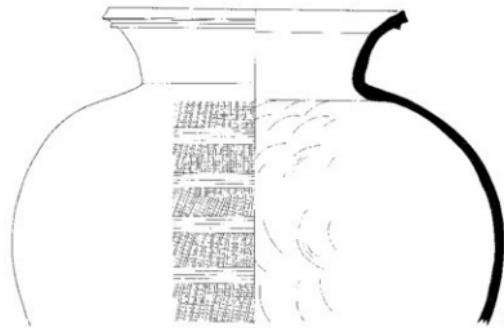
第31図 35号墳北埋葬主体実測図 (1:20)



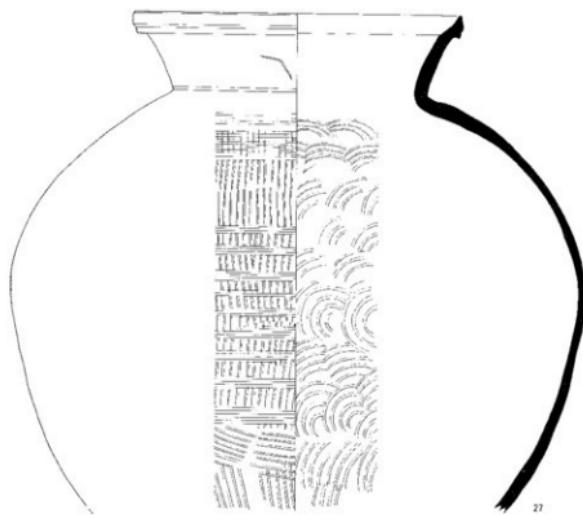
第32図 35号墳出土土器実測図1 (1:3)



26



26



27

第33图 35号编出上上器实测图2 (1:3)  
Figure 33, Drawing 2 of the actual measurement of vessel No. 35 (1:3 scale).



第34図 35号墳出土土器尖測図3 (1/3)

器は倒立していた。棺の北西側には墓壙掘形に沿って河原石が1個置かれていた。

須恵器枕の存在から、頭位を西側にもつ遺骸が葬られていたことは確実である。ただ、棺底のレベルは西側がやや下がっていることに加え、枕の位置が棺の中央よりやや北寄りに偏っていることから、これに向かい合うもう1体の遺骸の存在を推定することが可能かもしない。

遺物 南理縄主体に伴うのは、須恵器8点(第32図1-8)である。

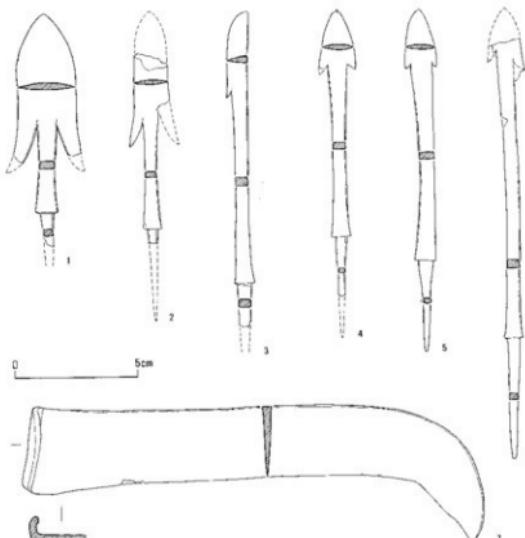
1・4、2・5、3・6

を組み合わせて使用されていた。环蓋(1-3)、环身(4-7)、小形直口壺(8)があり、いずれも焼成は良好である。

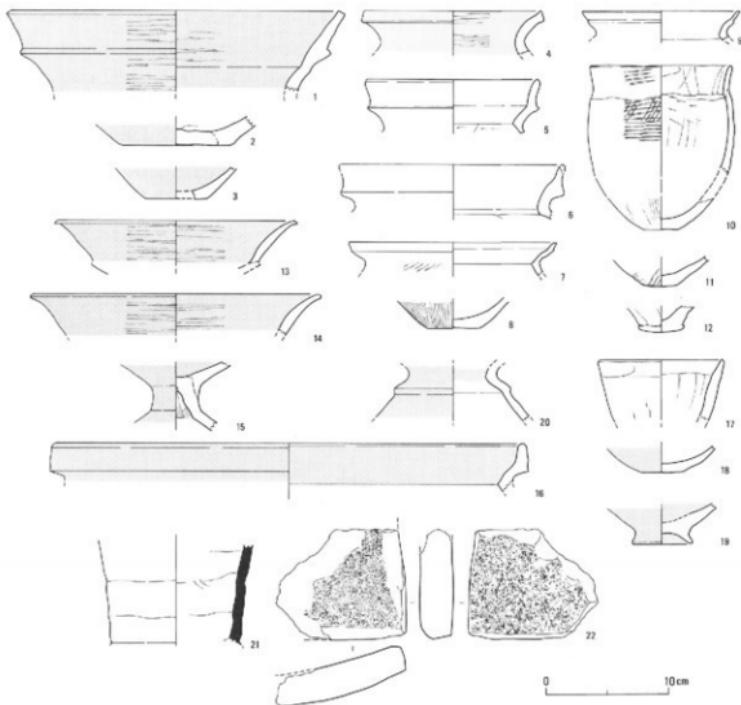
环蓋は、口径が11cmのものと12cm前後のやや大形のものとがある。天井部から口縁部へ移行する突出部はシャープにつくられている。环身は概して深く丸みを帯びるが、口縁端部を丸くおさめたものが1点ある。口径が10cmのものと11cm前後のものがある。环蓋天井部および环身体底部は約3分の2まで回転ヘラ削りされる。回転ヘラ削りの方向は、順逆がほぼ半々である。4の底部外面には1条の直線からなるヘラ記号が認められる。直口壺の口縁端部は内傾する面をもつ。

北理縄主体出土の遺物には須恵器13点(第32図9-13・15-22)、土師器1点(23)、鉄製品として鉄鎌1点(第35図7)、鉄鎌6点(1-6)がある。

須恵器には环蓋(9-13)、环身(15-20)、壺(21)、短頸壺(22)がある。环蓋は口径が13cmから14cmと



第35図 35号墳出土鉄器実測図 (1/2)



第36図 35号墳出土遺物実測図 (1:4)

いう大きさの割には器高はやや低い形態をもつ。口縁端部には内傾する面あるいは段を形成する。壺身は口径が11cmから12cmをはかり、体底部が平らに近くなる傾向をもつ。壺蓋天井部と同様に2分の1から3分の2までを回転ヘラ削りするが、削り方向は順逆ほぼ半々である。壺は口径11cm、器高14.3cmの小形品で、胴部下半外面にはナデ調整を加えるが、叩き面の痕跡をとどめる。14の壺蓋は造構から遊離して出土したが、形態から北埋葬主体に属するものと考えられる。

これらの壺類のうち、9、10、15、16、17、19、20には1条の直線からなるヘラ記号がある。27の頸部には別種のヘラ記号が存在する。

土師器甕は口縁部が直立に近く開くもので、口径10cm、器高13.8cmの小形品である。

鉄鎌は長さ18.8cm、刃部幅約3cmの曲刃鎌である。鉄鎌は、短頭柳葉式のものと長頭鎌がある。短頭鎌(1-2)は逆刺が長く広く開くもので、幅広のものとやや細身の2種がある。長頭鎌は鎌身が片刃のもの(3)とそれ以外の2種がある。

埋葬主体以外から出土した、古墳に伴う遺物には須恵器がある。甕は口縁部を上下に肥厚させたもの(第32図24)、上下に銳利に拡張したものの(第33図25)、口縁部下面に1条の突帯をめぐらせるもの(同26-27)があり若干の型式差をもつようである。24は埴丘流上から、25は北トレンチの流土、26は北

トレンチ周溝から、そして27は西トレンチの流土から出土した。壺の体部(34図)は、墳頂調査区の南西隅から出土したもので、2個体ある。これらの遺物はおそらく埴丘祭祀に関係したものとみられる。

本墳から出土した弥生土器(第36図1-19)には、壺(1・2)、斐(4-12)、高环(13-15)、鉢(3・16-19)、器台(20)があり、図示できるものを示した。

壺口縁部(1)は、段をもって外に聞くもので内外面を丁寧にヘラ磨きする。底部(2)は明確な平底をなす。斐は口縁部を単に丸くおさめるか、外方にわずかにつまみだすもの(7・9-12)と、いわゆる複合口縁のもの(5・6)があり、前者は叩き調整を施す。

これらのほとんどが口縁部や底部などの限られた破片で、全形を知ることのできる資料は少ないが、後期後葉のほぼ同一時期に属するものである。そのうち丹塗り土器が比較的多く含まれていることが注意されるが、遺構が検出されていないので本地点の性格については不明である。ただし、そのいっぽうで煮沸痕跡を示す甕がかなり存在することから集落地であった可能性もある。

その他の遺物として須恵器甕(21)と半瓦(22)がある。これは南トレンチ南端の墳外で、地山直上から一緒に出土したもので、いずれも平安時代末期に属すると思われる。

## IV まとめ

### 1 古墳群の年代と構成

今回調査した4基の古墳について築造年代を中心とした検討をおこない、つぎに他の古墳との関係をとおして日上戸山古墳群の形成年代と構成について整理する。

**1号墳** 本古墳からは時期を特定できる遺物は出土していない。埋葬主体で注意されるのは、竪穴式石槨と箱式石棺という組み合わせである。竪穴式石槨は、東側が幅広くつくられているので、頭位方向は東であったと推定される。箱式石棺の頭位方向は北である。両者は、軸線を直交させて位置している。こうした配置は、先に調査された日上天王山古墳と類似することが指摘されている(註1)ので、この点について検討する。

天王山古墳においては、南北方向の中心石槨の北端にこれと直交する第2石槨が存在した。中心石槨の頭位方向は南で、その足位側に東頭位方向の第2石槨が位置する。この配置を90°逆時計回りに回転されれば1号墳埋葬主体の位置関係に一致することは倉林の指摘のとおりである。

いっぽう、1号墳の竪穴式石槨と箱式石棺という埋葬方式の組み合わせは、天王山古墳の第2石槨と第1箱形石棺の組み合わせと一致する。このうち、1号墳の石槨内寸は長さ3.07m、幅は西側で0.8m、東側で0.9mをはかる。天王山古墳第2石槨の内寸は長さ約3.1m、幅0.8mで平面規模がほぼ一致する。また、両者とも壁体部は河原石を、天井石には地元で「尼子石」と呼ばれる溶結凝灰岩をそれぞれ使いわけていることなども共通する特徴である。

以上の共通性から1号墳には天王山古墳に近接した築造年代が推定されるが、若干の差異も存在する。天王山古墳第2石槨では、壁体の構築に先立ち、墓壇内に埴土をした上に赤色砂を積み上げ、その上に棺を設置して周囲と墓壇内に粘土を貼っている。これに対し1号墳の場合にはそうした複雑な工程は簡略化されているようである。この差は、両墳における被葬者の社会的地位の差に起因した現象である可能性にくわえ、1号墳が天王山古墳に遅れて築造されたという時間差を示している可能性もある。

この点に関し、1号墳第2主体の箱式石棺内には床に砂が敷かれていたが、天王山古墳第1および第2箱形石棺にはそのような痕跡は認められない。出土遺物から古墳時代前期でも古相を示すと考えられている近良丸山1号墳(註2)の第2主体箱式石棺は周囲に石槨を構築した特異なもので、中には板石を敷きつめていた。同古墳の第5主体の箱式石棺内は、素掘りの墓壇底をそのまま床面としている。これに対し、美作地方では5世紀代の箱式石棺内に砂や小砾を敷くことが一般的なので、これを時期的な特徴として認めることができれば、1号墳は天王山古墳にやや遅れて築造されたこととなる。

以上のことにくわえ、1号墳の中心埋葬が方墳にはあまり類例をみない竪穴式石槨という方式をとる点も考慮に入れ、天王山古墳の築造時期をかりに4世紀前半とした場合、1号墳は4世紀後半頃に築造されたものと考えておきたい。

**14号墳** 本古墳においても年代を示す良好な遺物は検出されていない。方墳で内部主体に粘土槨をもちいた例には津市山沼6号墳がある(註3)。これは一辺13.8m、高さ1.5mの規模で、鉢巻状の葺石を有する。粘土槨は墳丘頂部の北側に位置し、南側に平行して組合式石棺が存在する。5世紀代に位置づ

けられている。沼6号墳と同様の石棺をもつ津山市下迫山古墳には5世紀中葉でも前半に近い築造年代が考えられており(註4)、本墳は5世紀前半で位置づけられよう。

14号墳南墳外埋葬 本埋葬施設は、14号墳から離れて位置し、方向も一致しないので、14号墳とは直接の関係はないと思われる。埋葬施設周辺から出土した土器片は小片で、また埋葬に伴うものかどうか不明である。須恵器の副葬をみないので、この点からはすくなくとも5世紀前半以前ということがいえる程度である。

埋葬形態においては、使用された箱式木棺は、側板が小口板をはさむ形式のもので、細身の形態である。当地域では古墳時代前期にみられ、そのすべてが置き変わるわけではないが、群小墳の埋葬主体としては5世紀前半頃に箱式石棺に変化したとみられる。

いっぽう、本埋葬から出土した唯一の副葬品である大形の有袋鉄斧は、袋部の折り返しの接合部が密着した断面が丸丸方形を呈するもので、横口達也は弥生時代の同種の鉄斧について船載品であると指摘した(註5)。有袋鉄斧の製作技法を検討した金川善敬によれば、製作技法からみた類例は古墳時代前期後葉に出現するという(註6)。しかし、古墳時代における鉄素材の入手や加工の問題とも関連するが、橋口の視点からみれば、本品が古墳時代における舶載品である可能性も考えられ、その場合には年代もさかのほることとなる。

鉄斧は、木棺の東小口の外側に置かれていた。これに似た遺物副葬形態をもつ例として、津山市有本古墳群があげられる(註7)。これは7基の方墳からなる古墳群で、合計12基の埋葬主体のうち7基において、鉄製品が遺骸頭部の外側に副葬されていた。これらはいずれも棺内で、この点が畠山例と異なるが、畠山の場合は墳外埋葬のためか、棺が比較的小さく枕石が東小口板に近接して位置するため、結果として棺外に副葬された可能性がある。有本古墳群は出土土器等から古墳時代前期、布留式併行期に属すると考えられているので、本埋葬施設についてもその時期から大きく離れることはないと思われる。

その際に問題となるのが、約60m南に位置する日上天王山古墳との関係である。天王山古墳からは後円部壇端近くから2箇所の墳外埋葬施設が発見されている。これは壇櫛をめぐる農業水路で偶然に切られたため発見できたもので、周囲により多数の墳外埋葬が存在する可能性はじゅうぶん考えられる。ただ、天王山古墳に属するこれらの埋葬施設はいずれも箱式石棺で、本埋葬施設とは方式を異にする。そのため、両者の関係については、14号墳との関係同様、ここではその可能性もあるという程度の理解にとどめたい。

6号墳 中心埋葬主体出土の須恵器は、环身の寸法が口径10cm、器高4.5cm前後に集中するもので、体底部は比較的丸みを帯びる特徴をもつ。陶邑編年(註8)のTK4.7型式に相当し、6世紀初頭の築造と考えられる。

第2埋葬主体出土の須恵器环身はわずかに大形化の傾向をもち、环蓋の肩部の突出がやや丸みを帯びることなどから、中心埋葬より後出することはあきらかであるが、陶邑MT1.5型式並行期とするには躊躇される。ここではTK4.7型式に含めて考えておきたい。したがって本墳の営まれたのは6世紀初頭から前葉中の短期間であったとみられる。

35号墳 南埋葬主体の須恵器环身は口径が10cmから11cmをはかり、やや大形化する。これらは、TK4.7型式とMT1.5型式の中間的な様相をもつが、TK4.7型式並行期に含めて考えておく。型式学的には、6号墳第2主体に後出する可能性がある。

北埋葬主体上の須恵器坏類は大形化の傾向がさらに進んだもので、坏身の口径は11cmから12cmに達する。M.T.1.5型式に相当するもので、南埋葬主体が先行することを示しているが、埋葬施設の向きは後行する北主体の方が正しい東西方向を指しているのが気になる。

したがって、3.5号墳は6世紀初頭に築造され6世紀前葉まで營まれた。

古墳群形成の諸段階 紋山丘陵における土地利用は、現在のところ弥生時代後期までさかのぼる。丘陵北端には集団墓が営まれ、南半部には居住が認められる。丘陵南端部の日上天王山古墳の盛土から弥生土器が出土していることからみて、この段階の土地利用は丘陵全域に広がっていた可能性がある。

古墳時代前期前半段階に、日上天王山古墳が丘陵南端近くの最高所にはじめて築造される。それに統いて1号墳が丘陵北端に築造される。

1号墳が一辺約20mという規模にすぎないことからみて、両者が同一首長系列にある可能性は少ないと思われる。日上天王山古墳につづく前方後円墳としては、2km程北方に所在する正仙塚古墳が想定されている(註9)。いっぽう、両者の埋葬施設には先述した類似性が認められるので、1号墳は日上天王山古墳の被葬者集団に連なる者の墳墓と考えられる。その際に注意されるのは、日上天王山古墳後円部の埋葬施設が埋葬順に、1型穴式石棺(割石積み、長大)、2型穴式石棺(円腰積み、小形)、3箱式石棺という形式差をもち、埋葬方式における階層性を同時に示していることである。1号墳の埋葬施設は、あたかもこの2、3を部分的に写し取ったかのような様相を示していて、方墳という墳形とともに被葬者の社会的な地位をものがたっている。

その後、1.4号墳が丘陵中央部に築造される。この段階までは古墳の立地は丘陵頂部ないしは尾根筋にかぎられている。1.4号墳と1号墳との距離はおよそ200mあり、その間には過去に開拓を受けた分布上の空白区が広がっている。他遺跡の類例からみて、これらの地区にいくつかの前半期に属する古墳の存在を想定することも可能である。

現在の知見では、1.4号墳と以降の古墳群形成との間には、ある程度の年代の隔たりが認められる。

6号墳および3.5号墳は6世紀初頭のほぼ同時期に築造される。未調査の円墳は、いずれも低平な墳丘で、横穴式石室を内部主体にもつことの明らかなものは存在しない。いっぽう、丘陵中央部で過去に調査された8.0号(旧5.1号)墳を含む円墳3基からは、5世紀末から6世紀初頭に属する須恵器が発見されている。また、紋山丘陵の南西側ではTK4.7形式に属する一括須恵器が報告されていて(註10)、消失した円墳に由来する資料と考えられる。この古墳も紋山古墳群を構成した古墳のひとつとみられる。これらのことから、大半の古墳は5世紀末から6世紀初頭にかけて集中的に築造されたと推定される。

以上のことから、日上紋山古墳群の形成は、古墳時代前期前半における日上天王山古墳築造を契機とし、1号墳および1.4号墳といった方墳の築造、そして大半を占める円墳の築造という3段階を経たものと結論される。

以降の紋山丘陵の土地利用については、日上天王山古墳からも瓦碎等が出土していて、丘陵東側に位置する美作郡分寺および同尼寺で使用されたものが持ち込まれたと考えられている(註11)。今回の調査でも丘陵のほぼ全域で瓦や平安時代後期以降の土器が発見された。特に14号墳においては大がかりな墳丘の改変をともなっているが、同時期の追構は検出されておらず、これらの遺物の示す性格については依然として不明である。

「古式群集墳」の構成 紋山における第3段階の古墳群の諸特徴を整理する。その際、5世紀末から6

世紀初頭にかけて築造された群小墳をここではかりに古式群集墳と呼ぶこととした。

墳形の特徴は、80号墳を除いてすべて円墳で構成され、直径は40号の5.6mを最小とし、最大は25号墳の17.7mである。

現状では古墳密集部は、丘陵の中央から南西部にかけてみられるが、急斜面を除いた分布空白域はすべて過去に開墾を受けた地区である。丘陵北端近くの狭い尾根上にも2、3号墳が存在するので、古墳分布は丘陵全体に広がっていたとみるのが正しい。前段階までの古墳立地が丘陵尾根筋に限られていたのに対し、丘陵全域を墓域とするのが古墳立地上の特徴で、個々の古墳からの眺望といった視覚的な側面は相対的に失われつつあるように思われる。古墳群は明確な支群には分かれない。丘陵南端の54—56号のように等高線に沿って隣接する例がいくつかみられる程度である。

埋葬施設には竪穴式石槨と木棺直葬がみられる。過去の伝聞などによればこれにくわえて箱式石棺がもちいられた可能性もあるが、他古墳群の状況から、その場合でも副次的な理葬として採用されたものと考えられる。この段階の竪穴式石槨は、5世紀代に朝鮮からあらたに導入されたと考えられている。6号墳にみられる木蓋の存在がこのことを示している可能性もあるが、石槨の平面寸法は、先行する1号墳のものよりもむしろ大きい。

遺物として、多量の須恵器の副葬が特徴的である。これらの須恵器は、食物類を入れた容器として副葬されたもので、土器そのものの副葬が目的だったのではない(註12)ことはいうまでもない。この段階からみられる大量の須恵器の出土について、副葬を直接の目的として須恵器が大量生産されるようになったという見解がしばしばみられるが、これは本末転倒な議論であって、すくなくとも今回の調査で出土した須恵器の觀察ではほとんどの壺類に使用による摩滅が認められ、これらの土器が実生活に使用されたことは間違いない。この点に関して、各理葬には同時に煮沸形態の土師器が少数であるが、必ずともなうことも注意される。こうした副葬行為に見られる埋葬方式の特徴は、ひとことでいえば死者への食物供獻儀礼の組織的な出現で、古式群集墳の形成にあたっては死生觀の変革が同時になされたと評価される(註12)。

他の副葬品目中に鉄製武器なかでも鐵鎌が加わることも遺物における特徴のひとつである。今回、6号墳と35号墳から出土した鐵鎌は、互いに型式構成が異なるものであった。軍事的な編成のありかたについては、武器類の型式分析をふまえた検討が今後必要であろう。

つぎに、古墳群を構成するもののひとつとして外表施設があげられる。6号墳に認められた葺石は鉢巻き状のもので、墳丘斜面全体を覆うものではない。この種の葺石は前段階から存在するが、本段階ではほぼ消滅する。6号墳に使用された円筒埴輪はB種ヨコハケを施したⅤ期のものである。調査にともない12号墳からヨコハケを欠くⅥ期の円筒埴輪を探集している。美作におけるⅣ期とⅤ期の境界は須恵器型式でいえばTK47型式内か、つぎのMT15型式との間に位置する。

## 2. 古墳群の特質と評価

上述してきた日上歓山古墳群のあり方を、はじめに周辺の同時期の古墳群と比較してその特徴をまとめ、つぎに周辺地域との対比をつうじて本古墳群の位置づけを試みたい。

日上歓山古墳群の位置 5世紀末から6世紀初頭にかけて形成された、いわゆる古式群集墳については、一部含まれることのある前方後円墳をのぞけば、おもに円墳から構成される。方墳を主体とする5世紀後半までの段階にくらべた墳形の変化は、それ自体が視覚効果をもつ特徴として、副葬品やそ

の他の構成要素の変化とともに歴史的な意義をもっていることについては指摘した(註12)。

直径約20m以下(実際には17.8m以下)の円墳を主体とするこれらの古墳群は、等質的に評価されてきた傾向があるのも事実である。ここでは、古墳群間にみられる格差の検討をつうじて津山東部地域における日上歓山古墳群の位置づけを考えてみたい。

比較のために、全容がほぼ判明している長歓山北古墳群をとりあげる。長歓山北古墳群は、TK2式からTK4.7式並行期に形成されたもので、日上歓山古墳群に次ぐ規模をもつ。12基の円墳からなり、墳丘規模は直径8mから17mをはかり日上歓山古墳群とほぼ共通する。このうち、外表施設については4号墳から少數の円筒埴輪類が出土したのみで、葺石をもつものは存在しない。埋葬施設は大半が木棺直葬で、1・5・8号の3墳に竪穴式石棺が用いられている。

長歓山北古墳群と谷を隔てて南に位置する長歓山古墳群は、円墳十数基が存在したと伝えられるが、8基が確認される。径17m弱の2号墳を最大とする。両者を併せた古墳数は20数基となるが、日上歓山古墳群にはおよばない。

いっぽう、日上歓山古墳群では現在のところ12基に葺石の存在が推定され、埴輪をもつものも6基に達する。以上のように古墳群を形成する古墳数のほかにも、葺石や埴輪といった外衣施設の要素をもつ古墳数が卓越していることと、古墳群に同時期の前方後円墳を含むことの3点において、日上歓山古墳群は長歓山北古墳群よりも相対的に優勢な立場にあると考えられる。ただし、このことは、群を形成する個々の古墳が他の古墳群の古墳よりもすべて優位に立つということではない。個別レベルでは同様の古墳が存在したり、逆転現象も多く認められる。したがって、この場合の優劣関係はいっぽうで等質性を含むものである。

このような格差は、その他の周辺部における同時期に属する古墳群との間にも認められる。長歓山北古墳群の東南の丘陵上には、円墳2基からなる大畠古墳群、円墳4基(うち1基は7C代)からなる小原古墳群が存在する。前者は6世紀前半頃の築造でやや遅れる。これらの埋葬主体は、いずれも木棺直葬を主体にしていて、例外的に箱式石棺なども存在するが、竪穴式石棺は使用されない。

これに対し、長歓山東方に所在する茶山古墳群は、前方後円墳と円墳各1基からなる古墳群で、前方後円墳の中心埋葬だけが竪穴式石棺である。

歓山丘陵以東の約2.5kmの範囲には上記の古墳群のほかにも円墳6基からなる河辺小学校裏古墳群が存在していて、5世紀末から6世紀前半にかけて集中して古墳群が築造された様相を示しているが、日上歓山古墳群はこれらのなかでも最大規模のものである。

こうした津山東部地域における日上歓山古墳群の位置は、現状では美作地方においても変わることろがない。付表の古式群集墳一覧表においても、古墳数は最大規模のひとつに属する。その理由についてはただちに結論づけることはできないが、他の古墳群との比較でいえば、広い墓域を確保できる丘陵の形態とともに、先行する諸墳の存在が理由のひとつとして説明できる可能性がある。日上天王山古墳、日上歓山1号墳、同1・4号墳の3墳は、古墳時代前半代に属し、以降の群集墳築造開始との間には年代差が存在するが、1・4号墳周辺の古墳築造状況および日上天王山古墳北方にみられる古墳分布空白地の存在は、あきらかに前代の古墳の存在を意識したものといえよう。

日上歓山古墳群の特質と歴史的意義 美作における古式群集墳の意義については、これまでにも断片的にふれてきたように、前段階に対し、墳丘形態がほぼ円墳に統一されること、埋葬形態がそれまでの箱式石棺を主体としたものにぐらべ竪穴式石棺、木棺直葬が卓越すること、多量の須恵器副葬にみ

られる食物供獻が開始することに注目し、群小古墳豪造の大きな画期としてとらえた。そして、葬制の変革の背景としては畿内政権による軍事を機軸にした社会的再編の存在を考え、5世紀後半代の吉備の反乱伝承に結びつく可能性を指摘したことがある(詳12)。

日上歿山古墳群の調査結果は、群小墳形成における画期の存在をさらに強調するものであった。いっぽう、被葬者の社会的性をどうとらえるのかという問題については、課題として残されている部分が多いように思われる。これに関し、鉄津供獻の広範な普及も美作地方における本段階の特徴のひとつだが、今回の調査では供獻鐵滓は出土していない。これをどのようにみるのかも含めて、今日まで良好に保存してきた本古墳群は、これらの問題に接近できる重要な遺跡のひとつと考えられる。

## 註

- 1 谷林眞砂斗 1997 「第4章第4節豊穴式石室の特色と問題点」『日上天王山古墳』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第60集
- 2 小郷利幸 1992 「近長丸山古墳群」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第41集
- 3 今井克也 1968 「美作国津山市治六号墳調査報告」津山郷上絶報第1集
- 4 栗野克己・岡本寛久 1977 「下道山遺跡緊急発掘調査報告」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告17
- 5 橋口達也 1983 「ふたたび初期鉄製品をめぐる」、「二の問題について」『日本製鉄史論集』たたら研究会
- 6 金田善敬 1995 「有袋鉄斧の製作技法の検討」『古代吉備』第17集
- 7 小郷利幸 1997 「有本古墳群」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第59集
- 8 田辺昭二 1966 『陶邑古窯址群I』平安学園
- 9 安川豊史・坂本心平 1996 「正仙塚古墳測量調査報告」「年報津山弥生の里」第3号
- 10 京都外国语大学考古学研究爱好者会 1990 「岡山県津山市日上歿山古墳群表採遺物概報」
- 11 平岡正宏 1997 「その他の遺物」『日上天王山古墳』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第60集
- 12 安川豊史 1992 「古墳時代における美作の特質—群小墳の動向と評価—」『古備の考古学的研究(下)』山陽新聞社

## 付編 古式群集墳一覧表

岡山県

古墳群名	所在地	立地	時期	埋葬施設	副葬品	概要	文献
六ツ塚	津山市川崎	低丘陵上	5C末~6C初頭	木棺直葬、縄轔	馬具、鉄鎌、鉄斧、鉄錐、玉類多数、須恵器、土師器	前方後円墳玉系大塚(36m)と6基の円墳、消滅	1,2
長歟山	津山市同分寺	低丘陵斜面	5C末~6C初頭	木棺直葬、縄轔	鉄鎌、鉄錐、刀子、須恵器	8基の円墳、1・2号墳が調査消滅し、現存6基	3
長歟山北	津山市同分寺	丘陵端部上	5C末~6C初頭	竪穴式石室、木棺直葬	馬具、鉄鎌、武具、農工具、鉄斧、金・銀鏡、玉、埴輪	円墳11基	4,5
上原	津山市河辺字上原	低丘陵上	5C末~6C初頭	木棺直葬、縄轔	馬具、鉄製武器、鉄製農工具、勾玉、小玉、埴輪	円墳3基	6
大開	津山市二宮	低丘陵上	6C初頭	木棺直葬	鉄斧、鉄刀、鉄鎌、刀子、須恵器	円墳6基、2基は横穴式石室墳	7
才ノ崎	津山市船	低丘陵頂部	6C初頭	竪穴式石室、箱式石棺、石蓋土	須恵器、土師器、小玉	小円墳4基	8,9
天神原	津山市河辺	低丘陵尾根	5C末~	木棺直葬	銅鏡、須恵器	小円墳12基、横穴式石室墳2基を含む	10
集瀬	津山市草加郡	丘陵斜面	6C中頃~後半	木棺直葬、竪穴式石室	鉄刀、鉄錐、玉類、須恵器	小円墳3基、内1基は横穴式石室墳	11
門ノ山	津山市平福	丘陵尾根	6C初~中頃	木棺直葬、竪穴式石室	鉄刀、鉄錐、須恵器、玉類	円墳等18基	12
小原	津山市瓜生原	低丘陵頂部	6C初頭~7C前半	木棺直葬、石蓋土	撫先、玉葉、製塙土器、須恵器、土師器	円墳4基	13
大椎	津山市瓜生原	低丘陵上	6C前半~中頃	木棺直葬	鉄刀、鉄耳環、刀子、鉄鎌、玉類	円墳2基	14
茶山	津山市瓜生原	低丘陵尾根	6C初頭	木棺直葬、竪穴式石室	鉄刀、須恵器	前方後円墳(21m)、円墳1基	15
貢東	津山市金井	低丘陵尾根	5C	竪穴式石室、木棺直葬、箱式石棺	須恵器、土師器	前方後円墳(30m)、円墳3基、方墳4基	16
一貫西	津山市金井	低丘陵尾根	5C後半	木棺直葬	馬具、鉄鎌、須恵器、土師器	方墳2基、円墳(横穴式石室)1基	17
寺山	津山市同	低丘陵上	5C~6C	竪穴式石室、箱式石棺	鉄鎌、刀子、須恵器	円墳11基、横穴式石室墳含む	18
北山	美作町北山	丘陵尾根~端部	6C初頭~中頃	木棺直葬	馬具、鉄刀、鉄鎌、鉄錐、刀子、鉄鎌、玉類、埴輪	円墳4基	25
猪谷	美作町猪原上	河岸段丘上	6C	(墳丘削平)	須恵器	円墳6基	31
小中	勝央町岡	丘陵尾根~端部	6C後半	木棺直葬	馬具、金耳環、刀子、鉄鎌、須恵器、土師器	円墳7基	26
元定	落合町元定	丘陵地根	5C末~6C前半	木棺直葬、箱式石棺	鉄鎌、刀子、鉄鎌、須恵器	円・方墳13基	28
高尾B	落合町高尾	丘陵端~斜面	6C前葉	(墳丘削平)	鐵鏃先、鉄斧、鉄鎌、須恵器、土師器	円墳4基	29
中山	落合町西河内	丘陵尾根	6C初~後半	木棺直葬、竪穴式石室	鉄鎌、刀子、玉類、須恵器	円墳11基	30

四ツ塚	八束村上長田	丘陵尾根～斜面	6 C前半～中頃	木棺直葬	馬具、銅鏡、鐵刀、刀子、 筒鑓、鐵鎌、土壙	円墳19基、横穴式石室 を含む	27
頓崎	八束村頓崎他	尾根斜面上	6 C初頭頃	木棺直葬	須恵器	円墳11基	27,34
石道山	川上村西茅部 石道山	丘陵頂部から尾根筋	5 C後半～	箱式石棺？	鐵刀、地輪	円墳54基、横穴式石室 を含む	27
高砂山	邑久町山手	丘陵上	4 C～	箱式石棺	舶載、彷彿内行花文 鏡、琴柱形石製品、工具	200-300基の古墳、詳細 不明、全國遺跡地圖では円墳23基	19,20
土御茶臼山	長船町上師	丘陵尾根		豎穴式石室、箱式石棺		小円墳10基、横穴式石 室を含む	21
中井・南 二反田	岡山市中井	平地	5 C後半 (墳丘削平)		須恵器	円墳2基、方墳11基	22
堂山・ 堂山裏	岡山市高松	丘陵上		豎穴式石室、箱式石棺、埴輪(円 筒形)	鐵劍、鐵矛、小玉、鐵劍、 刀子、鐵矛、鐵鎌、鐵錐	20基前後の円・方・前 方後円墳。大半消失	24
西山	総社市麻尾	丘陵尾根	5 C中葉～後第	木棺直葬、睡床	鐵劍、鐵矛、刀子、勾爪、 小玉	27基以上の円・方墳	22
法連	総社市下林	低丘陵上	5 C中葉～ 6世紀前葉	木棺直葬、箱式石棺、石蓋土壙	鐵劍、鐵矛、鉄鎌、胡鎌、 勾爪、家形埴輪	約40基の円・方墳。5 基を調査	23

#### 広島県

古墳群名	所在地	立地	時期	埋葬施設	調査品	概要	文献
西拾貝	三次市西拾貝町	低丘陵上	弥生～4 C～	粘土棺、箱式石 棺、木棺直葬、上 塚	初期須恵器	140基の古墳、前方後 円墳4基	2,5
上四拾貝	三次市西拾貝町	低丘陵上	5 C末～ 6 C初頭	豎穴式石室、木 棺直葬	鐵劍、鐵刀、鐵矛、鐵錐、 刀子、鐵矛、鐵鎌、鐵錐、須 恵器	円墳14基	1
勇免	三次市人田幸町		6 C前葉～ 後葉	豎穴式石室、木 棺直葬、箱式石 棺	鐵矛、鐵矛、鐵錐、五 類、須恵器(MT15- TK10)	前方後円墳2基、円墳 30基	2
上定	三次市人田幸町	低丘陵頂部	5 C末～ 6 C初頭	豎穴式石室	椎文鏡、鏡先、工具、有 孔円板、鐵鎌、須恵器 (TK208-TK47)	円墳31基、半数以上は 横穴式石室地。3基は 調査	3,5
二工	双三郡吉合町		5 C末	豎穴式石室	椎文鏡、變形文鏡、筒形 銅器、短甲、鐵製武器、 鐵製農工具	帆立貝式墳2基、円墳 6基	4,5
淨樂寺	三次市高杉町	低丘陵上	5 C～	粘土棺、箱式石 棺	鐵刀、矛、鐵錐、土壙	118基(帆立貝2、方4、 円112)	5
七ツ塚	三次市小田幸町	低丘陵上	5 C末～	粘土棺、箱式石 棺		54基(前方後円墳3、 円墳51)	5
金口	賀茂郡福富町	丘陵頂部	6 C前半	箱式石棺、石蓋 土壙	鐵鎌、鐵劍、刀子、矛	7基の小円墳	6
四楨西	三次市和知町	丘陵頂部				前方後円墳1、円墳9	8
四楨	三次市和知町	丘陵頂部		豎穴式石室？		前方後円墳1、円墳20	8
西ヶ迫	庄原市平和町	山麓	5 C?	箱式石棺、石蓋 土壙	土製管玉	円墳25基	7

## 鳥取県

古墳群名	所在地	立地	時期	埋葬施設	副葬品	概要	文献
イザ原	倉吉市大谷字 大谷茶屋	山麓	5C後半 ～末	木棺直葬、箱式 石棺、石蓋上塗、 土器棺	鋼鏡、鉄剣、鉄刀、刀子、 土類	21基の円墳	7
小林	倉吉市大谷字 大谷茶屋	山麓	6C初頭 ～中葉	(横丘削平) 滑溝 に箱式石棺他	須恵器、埴輪、土師器	5基の円墳	7
立道東	倉吉市鴨河内	山麓	5C末～ 6C初頭	(横丘削平)	須恵器、土師器	5基の円墳	9
イスキ	倉吉市北面	山麓	5C後半	箱式石棺	鉄刀、鐵劍、玉、土師器	3基の円墳	10
沢ベリ	倉吉市不入岡	丘陵上	5C後半 ～	剖竹形木棺、第 式石須恵器、棺、 石蓋上塗	埴輪	前方後円墳1基、円墳 16基、方墳2基	11
下張坪	倉吉市呉川沢	丘陵上	5C後半	箱式石棺、石蓋 上塗	須恵器(TK216-TK208) 土師器	73基の円墳、67基を調 査	12
曲	倉吉市					約200基?	7
上神	倉吉市					15～20mの円墳23基	7
円満寺	鳥取市円満寺	尾根先端	5C後葉 ～	箱式石棺	刀子、須恵器	前方後円墳1基、円墳 35基、横穴式石室塙を 含む	13
六部山	鳥取市広瀬・ 久末	丘陵上	4C～7 C	木棺直葬? 箱式 石棺	鉄刀、須恵器、土師器、 土類	前方後円墳2基、円墳 93基、方墳3基、各期 の古墳含む	1,2,3
面影山	鳥取市面影山	丘陵上	4C～7 C	木棺直葬	鉄製武器・農工具馬具、 須恵器、土師器、鐵滓	98基、各期の古墳を含 む	4,5
長瀬高浜	東伯郡羽合町	砂丘	5C～	木棺直葬、箱式 石棺	鉄刀、刀子、須恵器、土 師器、玉類	前方後円墳1基、円墳 37基	14
川上	東伯郡東郷町	山麓	6C中葉 ～後葉	木棺直葬	刀子、鐵劍、須恵器	95基、大半は横穴	8

## 島根県

古墳群名	所在地	立地	時期	埋葬施設	副葬品	概要	文献
東首塚山	松江市大草町	丘陵上	4C後半 ～6C後半	(未調査)	円筒・器財埴輪、須恵器	円墳2基と方墳70基、 方墳は横穴墓の塙丘	1,2,3
増福寺・ 増福寺裏 山・十井	八束郡八雲村	丘陵上	6C初頭 ～6C後半	木棺直葬	鉄劍、鐵劍、須恵器	方墳46基	5
奥才	八束郡鹿島町	丘陵上	4C後半 ～6C後半	堅穴式石室、木 棺直葬、箱式石 棺	珠文鏡、内行花文鏡、素 面刀万力他鉄製式器等	前方後方墳1基、円墳 4基、方墳	7
八色谷	松江市上東川 津町	丘陵上	6C前半	木棺直葬	須恵器	基の小規模方墳で構成 される	15
柴	松江市						8
大坪	安来市						11
金崎	松江市西川津 町	低丘陵	5C後半 ～6C前 葉	堅穴式石室	内行花文鏡、鉄製武器、 船先、玉類、須恵器	前方後方墳2基、方墳 9基(現存5基)、史跡	12
長砂	松江市						13

結	鷹川郡斐川町 丘陵上	5 C 初頭 ~ 6 C 後半	木棺直葬、箱式 石棺	蛇形鉄劍、短劍、刀子、 鐵鏟	円墳20基、方墳14基	4,6	
二名留	松江市乃木瀬 高町	丘陵上	5 C 中葉 ~ 6 C 後半	箱式石棺	鐵刀、短刀、鐵鏟、玉類、 須恵器、土師器	円墳1基、方墳2基	9
仲仙寺	安来市西赤江 町	丘陵上	5 C 後半 ~ 6 C 初頭	木棺直葬、箱式 石棺	鐵刀、鐵鏟	円墳4基、方墳7基	10
御立山	安来市島木町	丘陵上	5 C ~ 6 C 後半	木棺直葬	鐵劍、刀子、玉類、埴輪、 須恵器、土師器	円または方墳8基	14
山ノ内	都岡郡旭町	丘陵上	6 C 初頭 ~ 7 C	木棺直葬、箱式 石棺	刀子、須恵器、土師器	36基、円墳29基、方墳 3基、他4基、横穴式石 室含む	19

## 香川縣

古墳群名	所在地	立地	時期	埋葬施設	副葬品	概要	文献
大井七つ塚	大川郡大川町 富田西、寒川 町神前右井 並ぶ	丘陵尾根上 に直線的に 並ぶ	5 C 後半 ~ 6 C 初頭	竪穴式石室	画像鏡、鏡甲、呪、馬具、 下、鐵鏟、鐵矛、須恵器、 埴輪	円墳13基(現存8基)、 初期群集地として香川 縣最大	1,12, 13,14, 15,16
石田神社境 内	大川郡宍道町 石田東	丘陵端部	不詳	箱式石棺	碧玉製勾玉、須恵器	直徑7~13mの小円 墳5基。	4,12, 15
寺尾	大川郡寒川町 神前、志度町 鶴部	5 C 中 頃? ~ 7 C 前半	竪穴式石室、箱 式石棺、粘土櫛 埴輪	劍頭2、刀身、鐵製武器、 玉類、須恵器、土師器、 埴輪	約30基、前方後円墳、 方墳各1基、他は方墳 とされる	4,17, 18,19, 20	
宇佐八幡	大川郡長尾町 名	小独立低丘 陵上	5 C 後半 代? ~	箱式石棺	須恵器、円筒埴輪	円墳15基、3基は横穴 式石室附	4,9, 13,19
龜島	大川郡長尾町 名	独立低丘陵 上	5 C 後半 代? ~	箱式石棺	須恵器、(伝)武刀劍、金 環、銀環、兼	円墳11基、方墳2基を 含む24基、直徑8~21m	4,9,13
西上居	木田郡三木町 井戸		5 C 末? ~ 不明(周溝のみ 残存)	箱式石棺	須恵器	円墳6基を含む12基、 内6基は後期後半代	21,22, 23
稚八原古 墳群(A 地区)	木田郡三木町 池戸		5 C 後 半? ~	箱式石棺	須恵器、土師器、ガラス 小玉	円墳8基	4,24, 25
稚八原古 墳群(B 地区)	木田郡三木町 池戸?		5 C 後 半? ~	箱式石棺	鐵鏡、鐵劍、鐵鏟、鐵矛、 須恵器、土師器	7基、円墳2基、方墳1基 と無墳丘	4,24, 25
(仮称)鶴 市	高松市坂田町		6 C 前半 まで	竪穴式石室?	馬具、挂甲、鐵刀、鐵鏟、 須恵器	円墳5基以上	13,26, 27,28, 29
城山	綾歌郡山田町 東坂元	丘陵尾根	5 C 後半 ~ 5 C 末	上横墓?	刀具類、武刀劍、曲刀鋒、 鐵鏟、須輪、須恵器、土 師器	4基の円墳、内1基は 前期	10,13, 30
浦山	綾歌郡綾南町 小野	独立低丘陵 尾根上	5 C 中頃 ~ 7 C 初頭	竪穴式石室、箱 式石棺、粘土櫛	鐵刀、鐵矛、U字形鋒先、 鐵鏟、鐵矛、刀子、馬具、 小玉、須恵器	17基、内6基の円墳を 調査、2基は横穴式石 室	2,3, 12,13, 24
岡の御堂	綾歌郡綾南町 瀧宮	低丘陵上	5 C 後半 ~ 末	箱式石棺、木棺 直葬短甲、鐵刀、 鐵劍、U字形鋒先、 馬具、須恵器	直徑10~12mの3基 の円墳		5,12, 13
瀧宮方塚	綾歌郡綾南町 北	台地突端部	5 C 末? ~		須恵器、土師器、鐵器、 埴輪	20数基で構成? 現存 3基	4,12,1 3,19
城下	綾歌郡綾南町 羽林				須恵器	円墳1基	4

津 頭 西	綾歌郡綾南町 小野	丘陵先端部	5 C 末	窓穴式石室	銅鏡、環鈴、短甲、革節 付耳釧、鉄刀、槍身	45基の占墳で構成、現 存しない	11,12, 13
地 神 山	綾歌郡綾歌町 高照	丘陵尾根上 に散在	5 C 前半 ~後半	窓穴式石室、木 箱直葬、箱式石 棺	鉄劍、鉄刀、鉄斧、錘、須 恵器、埴輪	円墳3基、前方後円墳 (20m)を含む5基	6,13
岡 田 万 塚	綾歌郡綾歌町 岡田		5 C 中葉 ~6 C 初 頭?	窓穴式石室、箱 式石棺	土器、鐵刀劍、鐵鎌、錘 造鐵斧、骨、須恵器、錘 惠器、埴輪	前方後円墳とされる1 基を含む円墳70基ほ どの古墳群。現存数基	4,13, 19,31 32
中 尾	綾歌郡終上町 今瀧	小丘陵上	5 C 後半 代?	埴輪削平	須恵器	円墳5基	4,12, 13
本 町	綾歌郡終上町 山田下	丘陵尾根 上	5 C 後半 ~末	窓穴式石室、箱 式石棺	鉄刀、鉄劍、鐵鎌、埴輪	円墳7基、径25mの群 中最大の1号墳を測定	7,12, 13,33
公 文 山	仲多度郡満濃 町公文		6 C 前半?		須恵器、埴輪	円墳6基	13,19, 24
天神七ツ 塚	仲多度郡満濃 町長尾		5 C 代?	窓穴式石室	(伝)須恵器	前方後円墳1基、円墳6 基、横穴式石室2基	34
葛 島 A	香川郡直島町 島島		6 C 中葉 まで	箱式石棺、小窓 穴式石室	鐵鎌、紡錘車、瓦類、須 恵器	すべて無埴丘の石室、 石室墓16基	35
葛 島 B	香川郡直島町 島島		5 C 後半 ~	同上	刀子、鐵鎌、須恵器、土 師器	同上23基	35
葛 島 C	香川郡直島町 島島		5 C 後半 代? ~	同上	刀子	同上8基	35

註 1 本表は、岡山県および周辺各県における、5世紀後半頃から横穴式石室導入前までの占墳を含む群集墳一覧表である。

2 本表の基礎となった資料は、津山市文化財センター・職員が分担して収集した。

その際、人久保徹也、大谷尾二、森本吉司、桑原隆博、中村弘、松井潔氏をはじめとする方々に各地のデータをご教示いたしました。お世話になった方々にあつくお礼申しあげます。

本表は、岡山県分については小郷利季が作成し、全体を中山俊紀が整理したものを基礎としている。

3 兵庫県分については整理が未だのため、掲載を見合せた。

4 なお重要な資料の遺漏や、誤りがあることを恐れる。引用文献については、執筆者名を省略した箇所がある。ご寛容を乞うとともに、ご教示をお願いしたい。

## 引用文献

### 岡山県

- 『六ヶ塚占墳群』津山市埋蔵文化財発掘調査報告 1962
- 『六ヶ塚古墳群』日本考古学年報
- 『津山弥生の里』津山弥生の里文化財センター年報 3 1996
- 『長崎山北古墳群』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第4・5集 1992
- 『長崎山北11号墳』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第5・7集 1996
- 『河辺上原古墳群』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第5・4集 1991
- 『大間遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第5・1集 1994
- 『才ノ船遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第1・8集 1985
- 『才ノ船古墳群』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第2・3集 1988
- 『天神原遺跡』岡山縣埋蔵文化財発掘調査報告第7集 1975
- 『篠瀬古墳群』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第1・3集 1983
- 『門ノ山古墳群』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第4・6集 1992
- 『小原遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第3・8集 1991
- 『大畠遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第4・7集 1993
- 『茶山古墳群』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第2・7集 1989

- 16 「一貫東遺跡」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第4・3集 1992
- 17 「一貫西遺跡」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第3・3集 1990
- 18 河本 清「美作津山市寺山A1号墳」『古代古墳第6集』1969
- 19 西川宏「吉備の国」学生社 1975
- 20 近藤義郎「前方後円墳の時代」岩波書店 1983
- 21 「長船町遺跡地図」長船町教育委員会 1987
- 22 「西山古墳群」岡山縣埋蔵文化財発掘調査報告書第109号 1996
- 23 「法蓮4号墳」総社市埋蔵文化財発掘調査報告第4号 1987
- 24 「岡山県吉備郡佐古田堂山古墳群」日本考古学協会年報第12・13集 1964,1965
- 25 「北山古墳群」岡山縣埋蔵文化財発掘調査報告第3集 1973
- 26 「小中遺跡・小中古墳群」岡山縣埋蔵文化財発掘調査報告第7号 1975
- 27 「蒜山原」1954
- 28 「元定古墳群」岡山縣埋蔵文化財発掘調査報告第9・1集 1994
- 29 「福田A遺跡・高屋B遺跡、落合町埋蔵文化財発掘調査報告」1983
- 30 「中山遺跡」落合町埋蔵文化財発掘調査報告 1978
- 31 「猪谷遺跡」岡山縣埋蔵文化財発掘調査報告第7集 1975
- 32 「中井・雨云坂山遺跡」岡山縣埋蔵文化財発掘調査報告第9・2集 1994
- 33 近藤義郎・今井亮「群塙墳の盛り」『古代の日本』4 1970
- 34 「鷹崎9号墳の発掘調査」『蒜山研修所研究報告』第1・2号 1986

#### 広島県

- 1 「中国海賊自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」広島県教育委員会 1978
- 2 「広島県双三郡・三次市史料総覧」第5篇 広島県双三郡・三次市史料総覧編集委員会 1974
- 3 「大判・上定・殿山」(財)広島県埋蔵文化財調査センター 1987
- 4 「二・三大塚」吉呑町教育委員会 1983
- 5 「探訪・広島の古墳」 1991
- 6 「金口古墳群」(財)広島県埋蔵文化財調査センター 1987
- 7 「西ヶ迫古墳群」広島県教育委員会 1983
- 8 村上昌彦「三次市和知町の古墳群について(2)」広島県埋蔵文化財調査センター研究報告Ⅱ(財)広島県埋蔵文化財調査センター 1992

#### 鳥取県

- 1 「六部山古墳群発掘調査概要報告書」鳥取市教育委員会 1991
- 2 「六部山古墳群」鳥取市教育福祉振興会 1994
- 3 「六部山古墳群Ⅱ」鳥取市教育福祉振興会 1995
- 4 「面影山古墳群・吉岡遺跡発掘調査報告書」鳥取市教育委員会 1987
- 5 「面影山古墳群発掘調査報告書「平成7年度」」鳥取市教育福祉振興会 1996
- 6 「尾高古墳群Ⅱ他」鳥取県教育文化財印 1995
- 7 「イザ原古墳群・小林古墳群発掘調査報告書」倉吉市教育委員会 1983
- 8 「川上7・3号・7・4号墳発掘調査報告書」東郷町教育委員会 1993
- 9 「立道東古墳群発掘調査報告書」倉吉市教育委員会 1993
- 10 「イキス遺跡発掘調査報告書」倉吉市教育委員会 1988
- 11 「大入岡遺跡群発掘調査報告書」倉吉市教育委員会 1996
- 12 「下張坪遺跡発掘調査報告書」倉吉市教育委員会 1987

- 13 『円満寺通跡群』(財)鳥取県教育文化財団 1983
- 14 『長瀬高浜通跡発掘調査報告書』Ⅲ-Ⅳ 1981-83

#### 島根県

- 1 「門脇俊彦「百塚山古墳群」「島根県大百科辞典」山陰中央新報社 1982
- 2 大谷亮二「東百塚山古墳群測量中間報告」「八雲立つ風上記の丘」No.139 八雲立つ風土記の丘 1996
- 3 大谷亮二「東百塚山古墳群の採集遺物」「八雲立つ風上記の丘」No.137 八雲立つ風土記の丘 1996
- 4 遠山弘一「島根県東部における古墳時代前半期の群集小墳について」「島根考古学誌」第7集 島根考古学会
- 5 『増福寺古墳群発掘調査報告書』八雲村教育委員会 1981,82
- 6 『上井13号墳発掘調査報告書』八雲村教育委員会 1979
- 7 『奥才古墳群』鹿島町教育委員会 1985
- 8 『柴古墳群』松江市教育委員会 1985
- 9 『二名留古墳群発掘調査報告書』松江市教育委員会 1992
- 10 『仲仙寺古墳群発掘調査報告書』島根県教育委員会 1971
- 11 『因達9号墳バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』島根県教育委員会 1976
- 12 『史跡金崎古墳群』松江市教育委員会 1977
- 13 『野田遺跡・向荒神古墳』松江市教育委員会 1981
- 14 三島育子「御立山古墳発掘調査」「芦田考古」No.2 島根大学考古学研究会 1963
- 15 『八色谷古墳群』島根県教育委員会 1993
- 16 『柴古墳群』松江市教育委員会 1985
- 17 『史跡金崎古墳群』松江市教育委員会 1977
- 18 『野田遺跡・向荒神古墳』松江市教育委員会 1981
- 19 『山ノ内古墳群』旭町教育委員会 1994

#### 香川県

- 1 「大井七つ塚古墳群発掘調査報告書」高松工芸高校郷土史部研究紀要第2号 1992
- 2 松本豊胤他「函山古墳群」油山古墳群調査団 1974
- 3 松木豊胤他「函山古墳群調査概要」香川県文化財調査報告第10号 香川県教育委員会 1968
- 4 松木敏三「青川駒背上の古式須恵器」瀬戸内歴史民俗資料館年報第6号 1981
- 5 渡部明太郎「岡の御堂古墳群」綾南町教育委員会 1977
- 6 「地神山古墳群説明会資料」綾歌町教育委員会 1985
- 7 『末期古墳調査報』香川県教育委員会 1976
- 8 「櫛八原古墳群発掘調査概報」国立医科大学建設候補予定地内埋蔵文化財調査報告 1975
- 9 国木健司「龜島・宇佐八幡古墳群分布調査報告書」高松工芸高校郷土史部 1991
- 10 『城山古墳群発掘調査報告書』坂町教育委員会 1992
- 11 「津堂古墳群」「新編香川叢書 考古篇」1983
- 12 萩本晋司「香川県における古墳時代中期群小墳小考」香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要Ⅱ 1994
- 13 香川県考古学研究会編「香川考古一特集:香川の中崩古墳一」第3号 香川考古刊行会 1994
- 14 國木龍司他「大井七つ塚古墳群発掘調査報告書」大川町教育委員会他 1992
- 15 「寒川町史」寒川町教育委員会 1980
- 16 國木健司「大井4号・5号墳」「香川県埋蔵文化財調査年報 平成元年度」1990
- 17 六車惠一「大川郡内免見翁式石棺二例について」「文化財協会報 特別号6」香川県文化財保護協会 1963
- 18 「寺尾古墳群」「香川県埋蔵文化財調査年報 平成7年度」香川県教育委員会 1996

- 19 松本敏二他「香川県埴輪出土追跡調査報告 I(資料 I)」瀬戸内歴史民俗資料館紀要第3号 1986
- 20 斎藤賢一「香川県出土古墳時代鉄製農工具調査報告」「瀬戸内歴史民俗資料館紀要第4号」1989
- 21 「西土居遺跡」「香川県埋蔵文化財調査年報 平成6年度」香川県教育委員会 1995
- 22 渡部明夫他「西上居古墳群 香川県木田郡二木町大字井戸字西土居における群集墳の調査」西土居古墳群発掘調査団 1983
- 23 「西土居遺跡群」「香川県埋蔵文化財調査年報 平成7年度」香川県教育委員会 1996
- 24 「新編香川叢書 考古編」香川県教育委員会 1983
- 25 「椎原古墳群発掘調査概報」国立医科大学候補予定地内埋蔵文化財調査団 1973
- 26 小竹一郎「高松市鷲市町所在相作牛塚古墳探査遺物報告」
- 27 藤井雄二「樹作牛塚」「文化高松 第6号」高松市文化協会 1984
- 28 川畠聰「高松平野の考古学のあけぼの」高松市歴史資料館 1994
- 29 藤井雄三他「遺跡が残りかける—高松の古代文化」高松市立図書館 1988
- 30 笹川龍一「城山古墳群発掘調査報告書」飯山町教育委員会 1992
- 31 寺田貞次「岡山萬葉の車塚」「香川県史跡名勝天然記念物調査報告 第十」香川県史跡名勝天然記念物調査會 1939
- 32 「犬塚」「香川県埋蔵文化財調査年報 平成5年度」香川県教育委員会 1994
- 33 渡部明夫「木割古墳調査概報—香川縣綾歌町綾上町所在竪穴式石室の調査—」香川県教育委員会 1976
- 34 「天神七ツ塚7号墳ほか」「香川県埋蔵文化財調査年報」香川県教育委員会 1995
- 35 松本豊胤他「鶴島」香川県埋蔵文化財調査報告書 香川県教育委員会 1974

# 写 真 図 版





1



2



3

1 調査前古墳全景(東から)、2 埋葬主体全景(北から)、3 中心埋葬主体全景(北から)



1



2

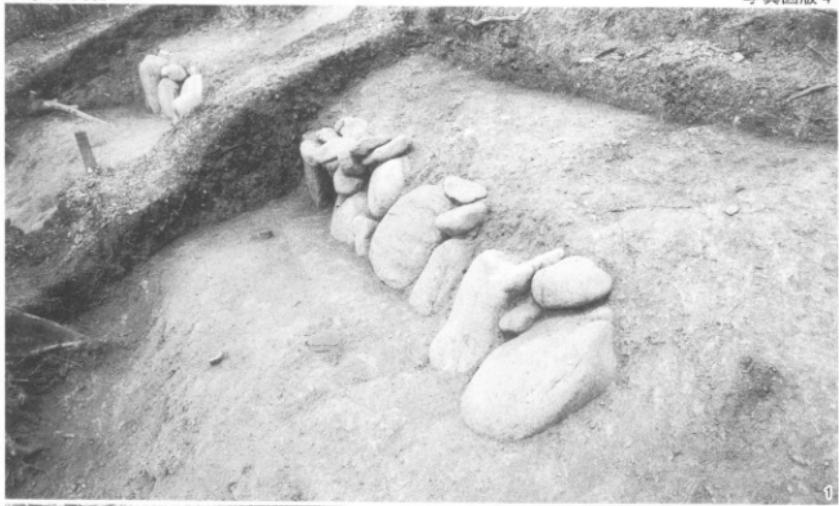


3

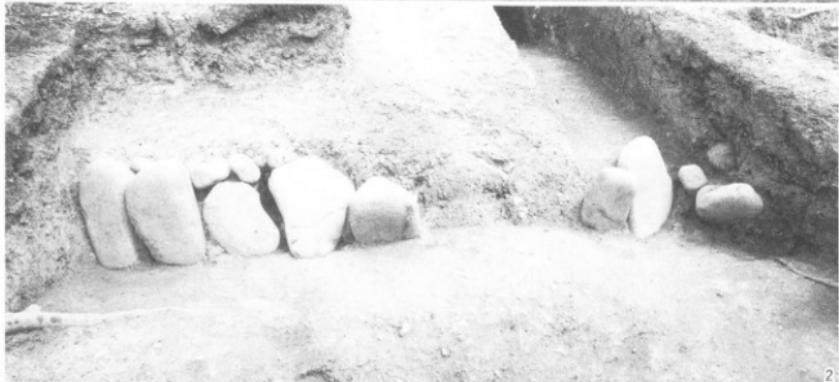
1 中心埋葬主体(東から)、2 同東壁面(西から)、3 同北壁面(北から)



1 第2埋葬主体(西から)、2 同(蓋石除去後、西から)、3 同遺骸頭部付近(南から)



1



2

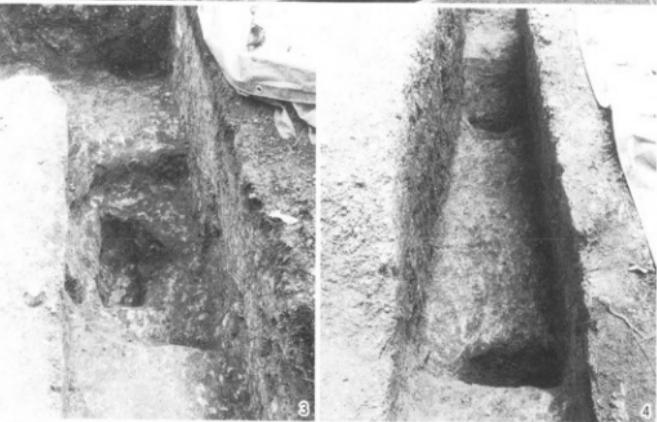


3

1 下層列石(北西から)、2 同(T 1 北から)、3 同(T 5 北から)

1号墳 墳丘・下層遺構

写真図版 5



1 T 3 全景(南から)、2 T 7 全景(南西から)、3 T 6 下層遺構(西から)、4 T 2 下層遺構(東から)



1 調査前古墳全景(南から)、2 西トレンチ(西から)、3 同石(南西から)



1 北トレーンチ(北から)、2 南トレーンチ(南から)、3 埋戻終了状況(南から)



1



2

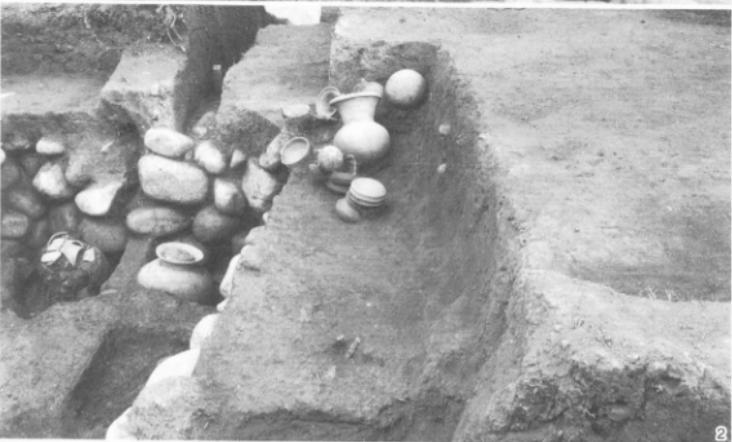


3

1 中心埋葬主体(東から)、2 同(北から)、3 同西小口側天井部土層(北から)



1



2



3

1 中心埋葬主体西側遺物出土状況(南から)、2 第2埋葬主体全景(東から)、3 同西側遺物出土状況(北から)



1 調査前古墳全景(北から)、2 T 1(北から)、3 T 2(東から)



1

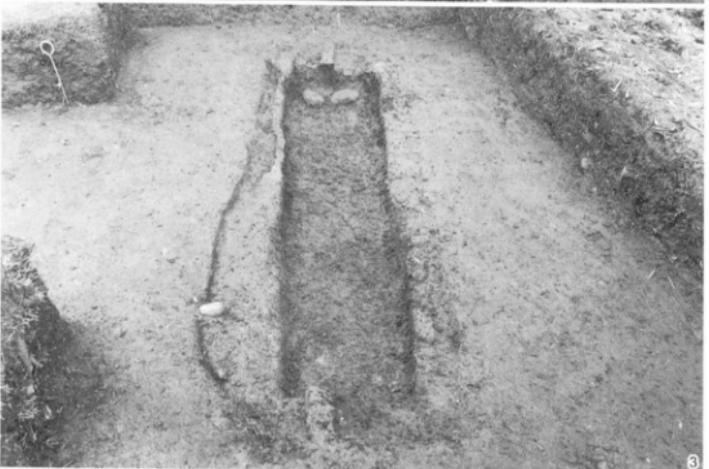


2



3

1 埋葬主体(粘土様、束から)、2 粘土層断面状況(西から)、3 T 4 (南西から)



1 粘土標東端部断削状況(南から)、2 同西端部断削状況(南から)、3 14号墳南墳外埋葬施設(西から)



1



2



3

1 調査前古墳全景(西から)、2 埋葬施設全景(西から)、3 北埋葬主体(南から)



1



2

1 南理桙主体(北西から)、2 同東半部遺物出土状況(南から)



1



2



3

1 北埋葬主体西半部遺物出土状況(北から)、2 同東端部遺物出土状況(南から)  
3 西トレンチ北壁遺物出土状況(南から)





2-14 第2埋葬主体出土須恵器、15同土師器、20填頂出土須恵器、21第2埋葬主体出土刀子、22・23 中心埋葬主体出土鉄鏃  
29-32 碧玉製管玉（30・31 中心埋葬主体、32第2埋葬主体出土）



1-7 北埋葬主体出土須恵器、9-22 南埋葬主体出土須恵器、23 同土師器、25 北トレンチ出土須恵器、27 西トレンチ出土須恵器